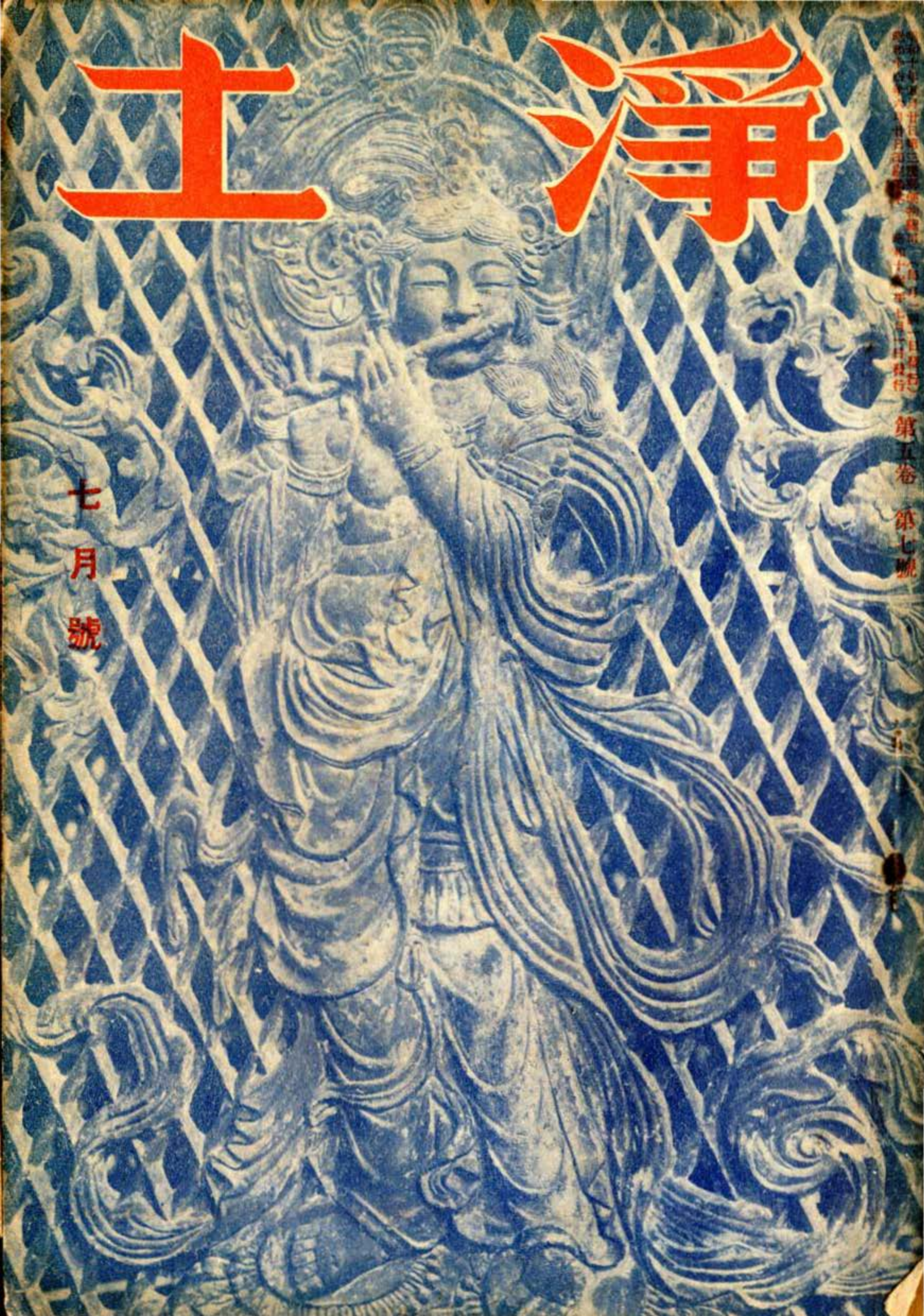


正淨

七月號

第五卷 第七號



◇仕奉後銃・久持忍堅◇

◎一圓の淨財・一年の慰問

君國のために身命を賭した白衣の勇士達は今や到る處に戦傷を癒し、病苦を養ふておられます。これ等の方々に心の糧として吾等が誇りとする、信仰の伴侶雑誌「淨土」を贈つて法味を愛樂して頂かうと思ひます。何卒この聖なる運動に速時參加して下さい。

病院
慰問

白衣の勇士に法味を捧げよ

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至五十部の雑誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げた
いと存じます。

◇御一人一圓の淨財を御喜捨下さい。一年間毎月雑誌が病院へ参ります

◇毎月五千部は是非入用です。五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一圓以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事務宛に！ 領收の證には宗報誌上に御芳名を掲載します。

◎一冊の淨土・一生の歡喜

隣家の人々

一瀬直行第一小説集

江東の地にその日暮しする人々の他は、くも哀しい人生を、冷徹な正なりアリの本質、その物語つてなるもの、生彩あらしめ、微なる隅々まで、透す著者の比類ない愛情と、温眠にほかならぬ、川賞候補の人々、がまた、昨年度小説界の代表作として、選定された。この代作の、知事、選定、新鋭の、全行の、使、女、作、集、よ、つて、今、始、め、て、世、に、開、明、さ、れ、る。

一、隣家の人々 兄のことば
二、猫捕り 蛙の目 たまり
三、水退路 あとがき

四六判二八〇頁 フランス綴函入美本
定價 一・六〇(千一〇)

大宰治書下し小説集

四六版 フランス綴函入美本
定價 一・七〇(千一〇)

愛と美について

最近の太宰治氏を批評して、川端康成氏は外村繁氏を援用し、太宰氏のやうな美しい言葉綴つた。昨日までの太宰氏はあまりにも高貴と清純への献身のため、自分自身さへ破つてしまつたが、そのやうな悔恨と苦惱は、もはや過ぎ去つた。今日の氏は、例へば一茎の花を揺つてゐる風のやうに美しく、素朴な心情のままに清らかな遠いあこがれに身を委ねてゐる。その手法も心理草紙といふよりは、抒情的に音楽めいた効果をおさめて、枕の底に、グイズム風の太宰氏の作風は、愛と美について、秘められたこの清雅な書下し短篇集こそ、今日稀に見る香気豊かな青春の書だ。

目次
秋風記 新樹の言葉 花燭 愛と美について 火の鳥

東京市四谷區北伊賀町
電話四谷 五二三八番
振替東京七八八五二番
新刊月報「篋」贈呈

竹村書房



◇浄

土

第七卷

七月號

目次◇

表

紙

扉・目次カット

東大寺大佛殿燈籠透彫「天人散華」

鈴木金平

う ら 盆 讀 本

親孝行とお盆の信仰	中村辨康(六)
送火・迎火	佐藤賢順(一〇)
盆踊りの話	八百谷順應(三)
うら盆の棚經	高瀬承嚴(六)
精靈棚	中村辨康(三)
燈籠	佐賀一海(二〇)

藪

の中の佛様

和田正系(一六)

山の隨筆

山の「渡り鳥」達

青柳優(一六)

盆

栽作り餘談

石川保太郎(一五)



信

仰

相

談

中村 辨康 (五)

英靈の新盆

戦死した弟……………島野 禎祥 (六)

を迎えて

殊勲甲の炭屋さん……………川端 祐輔 (四)

戦争の倫理を語る座談會……………浄き友の會 (三)

草市くさいちのころ 吉田絃二郎

(三)

童話 蛇の足……………東 一郎 (四)

歌壇……………與謝野 晶子選 (七)
俳壇……………太田 耳動子選 (六)

軍病院より……………東 慈道 (五)

日常動作式解説 法悦のひと時……………中村 辨康 (六)

鑽仰運動ニユース……………(五)
編輯 後記……………(五)

◇ 浄土 第五卷 第七號 七月號 目次 ◇

眼の疲勞に

結膜炎やトラホーム等の眼病にも、スマイルの優秀な治療作用は有名であります

爽快な効果がある

多忙な

時には眼も過勞します。

ところが疲れ目は放つて置くと往々にして結膜炎や眼性神経衰弱の原因となるので油断できません。眼の疲れた時、

スマイルは爽快な効果があつて結膜の異常亢奮と急性炎症を鎮めて、眼をサツパリさせ、快よく疲勞を輕快します。多忙な人達や眼の疲れる人達にすこぶる好評です。

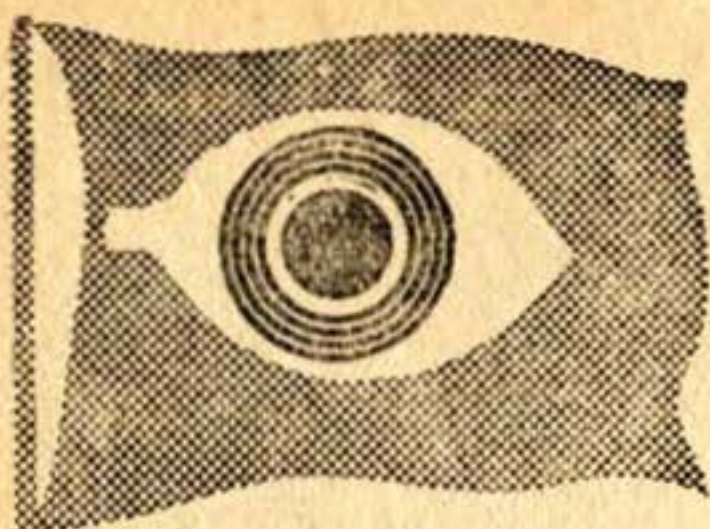
新銳眼科藥

スマイル

スマイルは有害な成分を含んで居ないので、眼作用の心配なく常用できます。
二十五錢 四十五錢
藥店にあり



株式會社 玉置商店

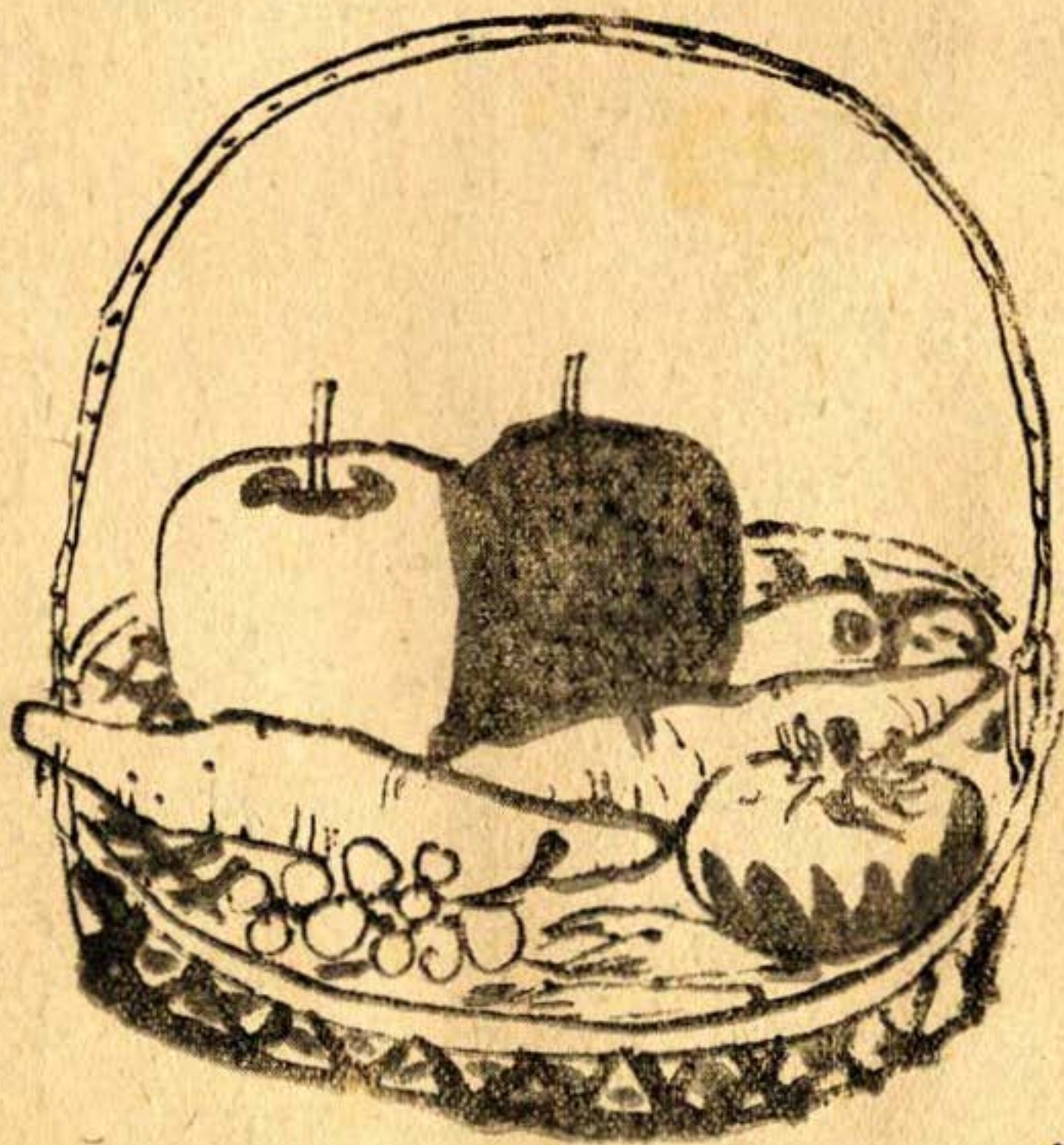


浄土

七月號

あみだ佛と
云ふより外は津の國の
なにはのこと
あしかりぬべし

法然上人詠歌



金



親孝行とお盆の信仰

うら盆
讀本

中村 辨 康

またお盆が來ました。

殊にお盆の七月十五日には盂蘭盆會と云つて、現在の父母及び七世の父母の、子孫への慈愛の恩や養育の恩にお報ひする爲に特別な供養を行ふことになつて居る日であります。

この盂蘭盆の緣由に就てはもう既に人口に膾炙されて居ること、今更ら御披露するまでもないかも知れません。然し順序上簡単に申し上げますと、之は佛在世時代に目連尊者から初まつたのださうであります。

誰でもさうでありませうが、自分の身の上に或る一つの大きな喜びを感じました時、第一に是を父母に報告して其喜びを頒つて、心から共に喜び合ひたいと思はないものはないでせう。況して信仰を獲た時の喜びは、天地間何物にも替へられない程の喜びであり、且つ死なねばならぬ生命の謎が解けて、一天曇りなき明朗な心境に達し、萬人の最も恐れる「死」から解放されるのでありますから、自分を産んで呉れた父母に之を告げて親子共に其法悦境の人として信に生き、そして心からなる喜びに没り合ひたいものと思はずには居られないでせう。

私などもやはりさう云つた氣持でした。そして最も深く喜んで下さつたのも母でしたし、一番早く共鳴して下さつたのも母でした。それは同じ血液が流れて居るからでもありませんが、また一面感情的に親子の愛情が最も深く最も強く結合して居るからではないかと思ひます。

殊に目蓮尊者は非常に孝心の深い人でした。

だから道を獲られた時、一番最初に思ひを致したのは「父母の鴻恩に報いん」とすることだったのでした。

ところが其頃お母様は既に亡くなつて居られて「餓鬼道」の苦しみを受けて居られたのださうです。

肉は落ち骨は瘦せて、青白い皮膚は僅かに其五體の骨を包んで居るだけです。食べ物などは全然無く飲み水さへ無いのです。私達の間に於ても一週間位の斷食する人は往々ありますが、それにしても水位は飲まねば續きません。然し餓鬼道では其水さへ火に見えるから飲みたくても飲めないのです。

目蓮尊者はその淺ましい哀れなお母様の姿を見て悲みに堪へず、急いで御飯を鉢に盛つてお母様の處へ飛んで行つて差上げたのです。お母様はそれを見て大層喜び左手に鉢を持ち、右手で御飯をつまんで口の中に入れやうとすると、忽ちそれが火と燃え灰となつてしまふのでした。さすがのお母様もあまりのなさけなさに泣き叫んで鉢を投げ捨て、目蓮に取りすがつて頻りに救ひを求めたのでした。然し目蓮尊者だつて何うする事も出来ません。驚き悲んで遂に釋尊の御許に歸り、委細を申し上げて「如何にすべきか」を泣きながら訴へました。

釋尊は靜かに

「目蓮よ。卿の母は罪業深くして到底卿の力だけでは何うする事も出来ないのだ。如何に卿の母を思ふ至情から大いに泣き叫んでたとへ其聲が天地神明を動かしてもそれは何の効果も齎し得ないのである。之は何うしても十方の衆僧の威神力をかりるより外に手段はない。だから此夏の安居の終る七月十五日は道を修める者達の懺悔を表白する聖き日である。此日に世の中の色々なおいしいものを盆に盛つて、其大勢の修道者達に供養するならば、彼等は皆な一心にそれを喜んで受けるであらう。この清淨なる戒律を嚴守して居る聖者達の徳は實に大洋の如くに無限である。随つてこの懺悔の僧達に供養するその功德も亦た廣大無邊であるから、それに依れば單に一人の母を救ふばかりでなく、七世の父母の滄炭の苦しみをも脱せしめる力があるのである。だから七月十五日を期して十方の衆僧に供養するがよい」

とお教へにられました。そこで目蓮尊者は色々とその準備を致しました。

釋尊も十方の衆僧が目蓮の供養を受ける前に、目蓮の七世の父母の爲めに禪定を行ふやうお言ひ付けになりました。

かくて大衆は供養を受けて大に歡喜しました。そして目蓮の悲しみは除かれ、目蓮のお母様は苦患をまぬかれることが出来ました。此時目蓮は釋尊に「世尊よ。私の母は今三寶の功德井に衆僧の威神力に依て三塗の苦みから脱れることが出来ました。が、未來の孝順の心をもつ多くの人達が、若し私がしたやうにするならば、また各自の七世の父母の苦を救ふてやる事が出来るでございませうか、如何でせう」とお尋ねしました。

「目蓮よ。後の世の一切の人々の中で若し孝順の志あつて、卿のなしたやうになすならば矢張り功德を得る筈である。念々に父母を憶ひ切々に亡き父母に孝行をしたいと思はゞ、七月十五日は佛の喜ぶ日であり、衆僧懺悔の日であるから、年々毎に百味の飲食を供へ以て施餓鬼の行事を爲すべきである。然らば、其人達の現存せる父母は無病長壽なるべく、また既に亡き父母祖先ならば倒しまに懸けらるゝ如き苦惱から悉く脱却することが出来るであらう」とお説きになつたので、それ以來孟蘭盆會が一般に行はれるやうになつたのだと云ふ事です。

して見ればこの孟蘭盆會が親や先祖への孝心を基礎にして居るものであることは、明瞭なことであります。

我國は元より「忠孝一本」の國柄である爲に、此美風は非常に早くから行はれたのであります。即ち推古天皇十四年に「是の年より初めて寺毎に四月八日、七月十五日に設齋せしむることとなり、齋明天皇三年七月「御彌山の像を飛鳥寺の西に作り、且つ孟蘭盆會を設け」天平五年七月に「大膳に令して孟蘭盆供養を備へしめ」た由で、古くから宮中を初め諸寺院などで行はれたのであります。随て「上行ふところ下之に倣ふ」で民間にも早くから廣く行はれることになつたのですが之も國柄に依つたもので全く不思議とすべきものではありません。

かくの如く孟蘭盆は元より孝養の爲の行ひであります。現に生存して居らるゝ父母への孝行は、其子供達の心掛け次第に依ていくらでも方法がありますが、既に亡くなられた父母祖先に對しては、精神的な方法より外にいい方法はありません。或は色々百味のお供へものをし或は施行などの法事を行ひまして其菩提の増進に回向すること以外一寸手段がないやうです。して見れば目蓮至孝の故事に倣ひ釋尊示教の制誡に従つて、此孟蘭盆會を懇ろになすことは、誠に祖先への絶好な孝養だと云ふことになります。

ところで念佛の信仰と孟蘭盆と如何なる關係を持つものでせうか。かう云ふことを問題にする人もありませう。然しかう云つた問題は、孝行が人間に不必要でない限りわざわざ取り上げて論ずるまでのものでないと思はれます。

それは畢竟孝心を離れて信仰はないからであります。若し念佛の信仰に「孝行」などはいらぬものだと言ふ人があるならば、それとはとんだ履き違への信仰で、そんな人に本當の念佛など出来る筈はありません。

佛は私達の親様であります。即ち無量壽として私達の命の親様であり、無量光としては私達の智慧の親様であります。況して「南無」と云ふ歸命の心は「まかせ切る」孝順心であつて、此孝順心なき、「南無」の氣持と云ふものはあり得るものでもなくまた實感となつて来るものでもありません。だから念佛心のあるところ、必ず孝順心のない筈はありません。

個人的な親様としては、父母祖先であります。また國家的親様としては畏れ多い事ながら、上御一人でまします事は申すまでもありません。そして靈的親様としては阿彌陀佛の外にはありませんから、此の三つの親様に對する孝順心は「孝」と「忠」と「信」とであつて、言葉や形は異つて居ても心の動きは全く同じものであります。

此意味に於て、孟蘭盆の行事が念佛の信仰と全然無關係だと斷定することは決して出来ません。

例へば道樂息子が始終兩親へ迷惑を掛け、親不孝を續けて居たが、驟然と其非を悔ひ改めて家業に精出すやうになつた心境と、熾惱の爲に始終踴らされて居て他人の迷惑は勿論社會國家へもすくなからぬ悪影響を與へつゝあつた私達が、一旦我が身の拙さを痛感して如來様の大慈悲に氣付き、驟然として念佛の信仰に入つた心境とは、決して別種のものではなく、同一の心狀であり感激であります。また話しは少し飛びますが、お盆の時に「お中元」として色々な品物をやり取り致します習慣があります。あれは元七月十五日に健任して居る兩親の息災延命をお祝するいゝとして差上げるところ品物を「生身魂」と云つた事から始まつたのださうであります。

日本歳時記の七月十三日の條に

「生身玉の祝儀とて、盂祭より前に、親族へ子方より酒さかなをおくり、又饗をなすことあり。何時の頃よりか始まりけん。今の世俗にすることなり。死せる人は亡き魂をまつるに、今生ける人を相見るが嬉しきとの心なるべし」

と云つて居るのを見ても、そゝろに嬉しい美風だと云ふことが判りますが、お盆を機會に親への孝養は勿論我が身や兩親への「生身玉」として念佛の信仰を進め、亡き祖先への「身魂」として念佛を贈り物にすることもまた嬉しきものゝ一つではありますまいか。

親孝行と孟蘭盆會！

それは全く我國特有の美しい風景であり、且つ念佛の心を一層新たに奮ひ起さしめる絶好な機會だと思ひます。



迎^{むかへ}火^び・送^{おくり}火^び

佐藤賢順

おんちいおんばあ、是をあかりに

お茶飲みにおいでなして下され

上總の君津郡では迎盆の火を焚く時に、さう唱へるさうである。搜してみたら全國で迎火を焚くとき、これに似た詞を唱へる所は、可成澤山あることであらう。

一年に一度、七月十三日から十五日まで先祖のお精霊様は西方極樂世界からお歸りになる。お精霊様とも言ふし、お盆にお歸りになるからお盆様とも言ふ。

お迎火を焚くのは、七月十三日の暮方で、私の寺の近邊でも（東京市品川区）、この日の夕方には大方どの家でも、玄關先や店先で迎火を焚き、めいめいのお墓へお参りして、墓前に木や紙の燈籠を上げて、日が暮れるとこれに火を入れる。墓の前へ来て迎火を焚く人もある。お精霊様はこの燈を頼りに、めいめいの家へ歸つてゆくのである。

十三日の夜、墓地全體に何百といふ燈籠が上げられて、それに火が點された光景は、壯觀である。その中を、夕食を済ませた家族連れが、家々の墓の前に立つて、きびがらを焚き、線香を上げ、お墓に向つて思ひ思ひの事を話しかけてゐる。

提灯を燈と持つてきて、お墓の前で火を點して、

「さア、××さん、歸りませう」とお精霊様に話しかけて、提灯を先に、道案内をしてゆく家族連れがある。その中に、パーマネット・ウエーヴの娘さんが、涼しさうなワンピース姿で、提灯を下げて先に立つて行くのなど、異様な感じである。文化や教養とは別に、民族のと言はふか人間のと言はふか、何か本質的なものが變らずに何時も働いてゐる。

「××ちゃん、さアおんぶしていきませう。」と兩手を後へ廻して、如何にも子供を背負ふやうな恰好をしてゐるのは、近頃子供を亡くした

母か、妹を亡くした姉であらうか。これが東京市の一隅の、京瀬國道に近い墓地で、私がこの目で見てゐる風景である。

十三日の夜は、幾百となく點ぜられた燈籠の間を、香煙が縷々として立登つて、何となく鬼氣迫る思がする。

× × × × ×

十三日のお迎火で、お精霊様は皆、それぞれの家へ歸つた筈である。それなのに、十四日の夜も、澤山の人がお墓へお参りに来て、矢張り前の晩のやうに、燈籠に火を點して、その前に額いて、懇ろに回向をしてゆく。であるから、その夜も幾百の燈籠の明りと立登る香煙とで、お墓は賑かである。前の夜、何か用事で忙しくて迎ひに來られなかつた人達が、一日遅れて迎へに來るのであらうか。さうでないとしたら、お精霊様のお留守の所へ、何をしに來るのであるか、これはこの寺の和尚である私にも、今もつて腑に落ちない。

この寺では十四日の朝から棚經に廻るのであるが、同じ區内の大井町邊では、お盆中は分家は本家へ、本家からは又、分家の精霊棚へお参りにゆく。そうしてお互に

結構なお盆で……

と挨拶を交はすのである。曇つてゐても、雨が降つてゐても、大ていは「結構なお盆で……」と言ふやうである。

× × × × ×

お精霊様にはそれぞれの家へ精霊棚を設けて、十五日の夕方まで御

供養をして、その夜、またきびがらを焚き燈籠を點けて、お迎へした時と同じやうにお墓まで送つて來る。送る時には川邊や水邊へ送つて、そこで送り火を焚き、お精霊様の御馳走を胡瓜やなすの馬に乗せて、一しよに流してやる地方もあるさうであるが、この邊ではお墓へ送つて來るのが通常である。

この寺の檀家でずつと離れた神奈川寄りの方に住んでゐる人があつた。寺では古くから新曆でお盆を迎へてゐるが、其の地方では數年前まで、一月遅れの八月十三日からお盆になる。それで、土地の習慣に従つて精霊棚を飾るのは八月であるが、寺の方では、七月にお盆を勤めるので、お迎火だけは七月十三日に焚きに來て、お迎へをしてゆく。

それから約一ヶ月といふものは、この家のお精霊様は何處へ行つてゐるのであらうか。その行は判らない。何處を道草食つてゐるのだらうか。これがこの家の人々の氣懸りの種であつた。

ところが數年前、其の地方も東京並みに新曆でお盆を勤めることになつて、その人は、

『やれやれ、これで漸くお精霊様も、道草を食はずに、眞直に家へ來てくれることになりました』

と半ばは笑ひ話に紛らせて、半ばは本気で、しみじみと言つたのである。



盆をどりの話

八百谷順應

盆踊に就てはいつ頃の時代から始まつたかと申しますと、慥かな文献考證を未だ見ておりませんから、はつきりした、ことは申上られませんが、兎に角日本のをどりと云ふことを考へてみますと、一體人間が喜怒哀樂の感情がいよく募つてくると、ちつとして居られず、所謂不知手舞足踏で、はたからみたら踊つて居るのである。其外感情の激越した場合でも同じことです。こうした、ことは恐らく人間の世界が始まつた時からのもので、即ち感激の極致が肉體に依つて表現されたもの、之れを藝術的に見て、をどり、と云ひ、更に美化され藝術化され鳴物や音楽なる藝術と密接な連鎖關係が出来上つて舞となり、踊となつたと考へるのである。勿論種々な歌謠もくつゝいてである。

こうした本然のすがたが道徳化され神聖化され藝術化され音楽化美化されたところに神樂あり法樂あり民衆化されたところに郷土舞踊あ

り、佛教化民衆化されたところに盆踊が出来上つたものと考へられる。そこで我國の古い昔から集體的に踊つたり歌つたりした記録を調べてみると色々あるが先づ手近な所で例の歌かゝひとか歌垣とか云はれておるものなぞは代表的のもので、之れは宗教的の方面の意味よりは外の意味に依つて行はれたものであつて、之れには學者に依つては色々違つた意味に考へられておるが、夫れから朝鮮や支那と交通する様になつてから、殊に佛教渡來以後は、わけても色々な音楽や舞踊の立派なものが次から次と傳來した。

儀禮的の音楽も舞踊も、又佛教關係の音楽や舞踊も、勿論幾多の樂器も夫れに附隨した衣裳も道具も、社寺の機構や儀式の發達につれて、其れ等の儀式に、神樂に、法樂に、盛んに取入れられて又頗る發達した。今皆さんが參詣する古い大きな神社寺院の什寶物に、古い雅樂や伎樂のお面や樂器衣裳道具等の優秀なものを拜觀して、我國の古

い時代に頗る發達した音樂や舞踊のあつたことを御想像になることゝ考へる。古い昔しの我々の祖先達、即ち其の當時の民衆も貴紳も夫れ等の舞踊音樂の演奏を實際に見聞したので。而し是れ等の演奏者は宮廷や大社や大寺に專屬した伶人や巫や覡や舞法師其他限られた團體のもので、一般民衆のものではなかつたのである。

けれども、之れ等の立派な音楽や舞踊がやがては民衆の野に自然に起つて來た、所謂郷土の音楽舞踊に上述のものが大なる影響を與へて、夫れ等野に起つた民衆の郷土舞踊や音楽を頗る發達せしめた材料となつたのである。古い民衆の田歌や野の踊りが田樂の先驅をなしておることは御承知の通りである。

其他幾多の神社寺院等で其の社寺を背景として神樂殿や舞殿や廣い境内の芝生の上や森の中や殿堂の中で盛んに祭禮や法會に附隨して執り行はれるのを拜觀した民衆は又自分達の郷土に自然に芽ばへ、いつとはなしに發達していつた豊年踊や田植踊や大漁踊や、其他幾多の勞働歌や其のをどりに、又郷土愛の純情から出來上つた諸種のお國自慢の歌やをどりに結びついて、それ等を頗る發達せしめた。

それから我等の祖先は、其の祖先以來の民族思想の上から、我等の祖先々考は勿論一族先亡のみ魂は神となり、佛となられて、やはり我等の現實の社會をつねに影護して居て呉れる、又自分達の喜ぶ事悲しむことはおなじ様に喜び且つ悲しんで呉れる、我等と喜怒哀樂を共にして呉れるものと考へて居る。之れこそ祖先々考を敬仰し祭祀を崇拜

し又子孫を永久に幸多かれと祈念し懇禱し隆昌と繁榮を其の一族より一部落に、更に邑に里にと遂に同胞全體の上に及ぼして往こうと云ふ大理想が我國民思想の傳統的精華となつて來たのである。

そこへ又支那印度等から種々な思想や靈魂歸來說等の思想もはいつて來て、はやくから我國民思想の上に深く植附られ、夫れに佛教の孟關益供養の行事が盛んに行はれる様になり殊に祖先以來忠孝思想に依つてはぐくまれて來た我國民思想とびつたり一致して行つて益供養の行事は色々な形式に依つて非常に發達し複雑になつて行つた。

夫れに御先祖様始め、祖父も祖母も親も子も、一族兄弟はらからの亡き魂が年に一度の晴れて我が家への御歸りだ、我が國民思想の衷情から……「露の夜露に面影なりとせめて迎へ火、魂まつり」舊入の子が歸つて來るのを眞心つくして待つ母親の氣持でこうして……お盆の精霊棚は千有餘年の昔から我國民の家庭に残らず立派にかざられ眞心こめた御供養の品々が所せまきまで列べられるのである。まだそれ丈では満足出來ない、追善回向の功德もつもふ、わづか三日のおやどりだ、家の中もきれいにしておこふ、仕事もやすんで、すこしはおしやれもして、家も家族もきれいになつて居るところを見ていただく、御精霊様は生前あれもすきだつた、これもすきだつた、と、のみものも、たべものも、すきだつたものをいろいろと追憶して、いろいろ／＼御供養する、こうした純情から

「昔し話しについ夜もふけて、月もかたぶく西の空」

と次から次と亡き人の生前の好きだった事が追憶されて、生前鑑守の森やお寺の庭で、楽しそうに村の衆とほうかむりして踊ったこと楽しんだことが追憶される。せめて、へたでも歌つて聞いて頂だから、踊つてみて頂かう、そうして、お慰め申上よう、そうして喜んで頂かう、そうしたことが一家庭から一家庭、隣人から隣人へ部落から邑へ里へ同じ、きもちの人々が集つて、ありあはせた品物で拍子を取つて遂にいつとはなしに、佛供養の盆をどりが村に野にお寺の庭に、鑑守の森に、まんまるな、あかいお月様をたよりに、芽ばへていつたのではないでしうか。

盆をどりのことを考へる時、平安朝の末期に市のひじり空也上人が瓢や鉦をたいて歡喜勇躍して歩つたあの念佛踊や諸所のお寺の詠歌踊、和讃踊、鎌倉期に起つた念佛踊や一遍上人の鉢たき、團扇太鼓でをどる題目踊、足利時代の諸種の民謡も、諸大社、諸大寺の勸進念佛踊も、盆踊とは、どうしても他人扱は出来ないものである。神社のお神樂も、諸大寺の法樂舞もあかの他人とは考へられない、昔しの價面目のお坊さんが、なんでこんないゝ機會をとらへずに置きませう。此の機會にお説教もあつたでしう、タクト、も取つたでしう、今と違つて昔しのを坊さんの中には、田樂法師も延年の舞の法師も澤山居たのです、をどりの按舞もしてやつたでしう、歌も曲も作つてやつたでしう、こうして盆踊も、まじめな氣持で眞面目に、をどられ

たでしう。

「輪廻はなれて氣も輕々と、まはる踊の輪の丸さ、」

「雲の間から羨ましげに踊みて居るお月様」

「歌ひませうよ聲はりあげて國の榮が身の榮」

「心廣けりや世間も廣い、働きや身もたつ、家もたつ」

「國の榮も身の喜びも心一つが力くさ」

「村よお盆よおゑんまさまの赤いお顔が忘れられよか」

此の歌の氣持のよさに、こうした盆踊が享樂機關の乏しかつた時代の農村に漁村、享樂的意味も含まれて、到る所で年中行事の大切な一つになつて行つたのである。幾分弊害もあつたとしても、後に至つて宗教的情操が踊る人からも薄らぎ、指導者に人を得なくなつてからの盆踊は、お話しにならないものになつてしまつたことは皆様先刻御承知の通りであるから蛇足を加へることは遠慮しました。

愛國行進曲や愛馬進軍の歌、太平洋行進曲は今全國津々浦々に申すに及ばず帝國勢力國內では何處でも歌はれて居ます、そうして、大分其の意味も理解され國民精神總動員の上に少なからず役立つて居ります、年に一度のお盆も目の前に來ました、興亞の尊き礎とお成り下された御魂をどうして御慰め申上げましよう、どうして御供養申上たらいいでしう。

其の御英靈の御遺族方をどうして、ほんとにお慰め申上ましよう。



新舊諸國盆踊歌

御出動將兵方の御家族方をどうしてお慰め申上たらいゝでしより。
時節柄を考へましたことから、お盆に因んで盆踊のことを編輯部から御話しがあつたので、寸暇を利用して書いてみたのです。尤も皆様の肩の、こりを、少しでも柔らげ申上るつもりで最後に新舊取交ぜ諸國盆踊歌少しばかり御紹介申上ります。
尚盆踊で尤も代表的で今でも盛に踊られ居るものでは木曾の盆踊ナカノリサンです。又最近文部省内佛教音楽協會制定の盆踊は新時代の代表的のもので今迄の盆踊の弊風を一切是正されたもので理想的である樂譜も振も歌も一冊の本の中に親切丁寧に誰にでもすぐ踊れる様になつて居る。

野にも山にもお主さよかれ、お主のおかげで世に
いづる
親は此の世の油の光、お
やが御座らにや光らない
隙を隙をと隙そしりやん
な、そしる我が子も人の
隙

(堀津)

(和泉)

色の黒いのお白いつけてお母みてくれつるし柿
山が焼けるが立たぬか雉よ、これがたゞりよか子をおいて
きいて飾いは舞臺櫓よ心やさしい地藏様
親は子と云ふて尋ねもするが、親を尋ねる子は稀れな
踊り念佛氣も輕るゝと、あすの家業が苦にならぬ
娘十七緋鹿の子かけて親に見しよとて盆踊
西と東の境がとれて丸い世界に盆をどり
月にをどれば袂がしめる御慈悲うれしやしみゝと
今宵初盆あの子のお盆涼し細かやよなぜ青い
以上

佃の盆踊歌

東京佃島の盆踊は古來有名であるが、その盆踊歌の中に五世川柳が作つた佛教的なものがある。
「踊れ人々目出たい盆ぢや、五穀實りて大風もなし、是も神恩佛の恩ぞ、恩を思はゞ信心起せ、信に徳あり數へて見やれ、一に一世の災難のがれ、二には日夜に氣を和らげて、三に三毒消滅するぞ、四には自然と家富榮え、五には後世の疑ひ晴れん、六には六親皆むつまじく、七には七福その身に備へ、八に八大地獄に墮ず、九には九品の淨土へ生れ、十に十方諸佛のたすけ。わすれまいぞよ朝夕ともに、信の一字が身の肝要と、座外に唱へる南無阿彌陀佛」

(同)

(同)

(同)

(同)

(同)

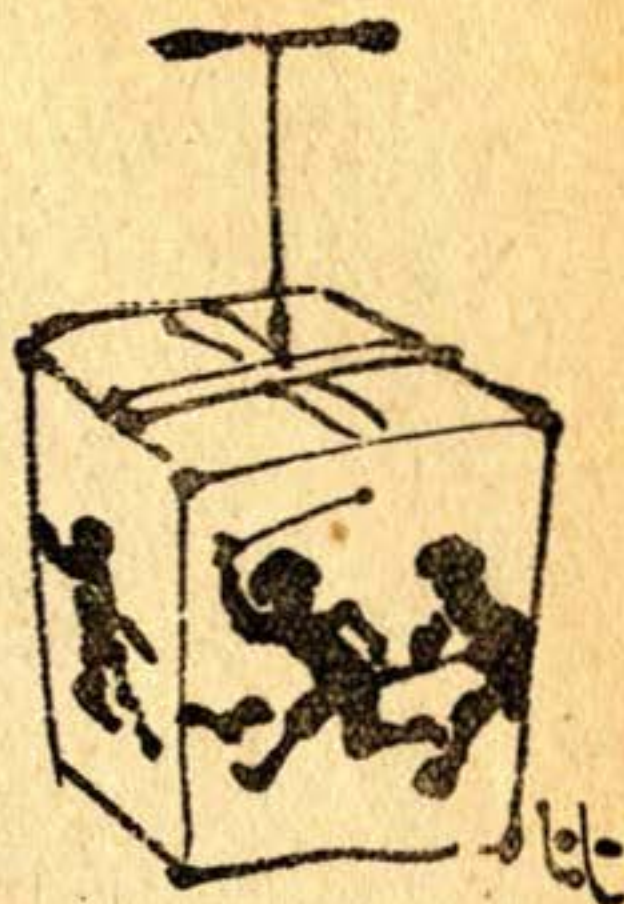
(新)

(佃島)

(越後)

(紀伊)

(大阪)



孟蘭盆の棚經について

高瀬 承 嚴

魂まつり

「孟蘭盆や百年後の今の人」、「孟蘭盆や佛の花に女郎花」などと俳句られる時季が来た。

孟蘭盆會が、佛教年中行事の一として行はれ、殊にこれが頗る家庭的に行はれるのは魂まつりである。魂まつりが、我が宮中で始めて行はれたのは、天平五年七月であるといはれてゐる、祖先を大切にしてい、み魂を祠ることは、世界に比類のない我が國の美風である。殊にこの孟蘭盆會にあたり、み魂を祠るには、それ／＼の家の佛壇に眞菰や眞狭籬を買つて来て飾るところもあるが、又、特に佛壇の前に造つて廣々として飾るところもあつて、これを精霊棚とも魂棚とも盆棚ともいふてゐる。「盆棚はみんな畑の月たらず」「魂棚の中は畠の鼻まがり」と川柳子がふざけてゐるように、たとえ、出来ばえの良くない

ものがあるにしても、み魂が牛に乗つて一年一度、元の古巢に歸つて來られるためと思つて、茄子、胡瓜などに苧殻で四足を作つて飾つたり、季節のあらゆる野菜や果物、お菓子、うどん、そうめん、おはぎ、ぜんざいなどを、ところせまきまでに供へ、御霊職も涼蕘の句に

「兩の手に四五膳づつや魂祭」

とあるように、佛壇一靈ごとに獻げて居り、太祇が

「遺言の酒そなへけり魂祭」

とあるように、生存中の好物をあれこれと供へるあたり、誠にほほえましい風景であるが、一面に惓然の句に

「かなしさや麻木の箸もおとななみ」

とあるあたりは、先き立つた可愛い子供のための供養を作る親の心の奥を思ふと目がしらが知らず／＼と熱くなる。これら心ゆくばかりの供養は、何れの家庭でも、多くは、平素は佛様には朝一度、御供養

するのが關の山であるが、盂蘭盆會中は、三度の食事はもとよりのこと、午前午後のお茶受から、夜は寝る前にお茶を献ずるなどする。季吟の句に

「まざく／＼とゐますがごとし靈まつり」

とあるように、全く生ける人に使へると同じである。これは、本来ならば、日々このように行はなければならないのであるが、家業の忙しさに逐はれて、怠り勝たのを、せめて盂蘭盆會中はとの心からなる御先祖への御使ひで、全く他に見ることの出来ぬ、我が國の良風美俗の一である。

み魂を祀る盂蘭盆會は、地方に依つて七月、八月、又は陰曆七月の差はあるが、その月の十三、四、五の三日間行ふを通例としてゐる。

これは、目蓮尊者が、釋尊から教へられた僧自恣と云つて、釋尊の御弟子達が一夏九旬の間の靜座修練の終へた七月十五日に、母上のため衆僧に供養を行ひ、母上を餓鬼道の苦しみから救つた記念日であるに基いたものである。

迎え火と送り火、草市

魂棚のかざりが出来上つた十三日の夕方になると、何れの家でも、入口で芋殻を焚く、これを迎え火といひ、精霊はこの火をたよりに歸つてくるとの信仰がある。

「迎え火の淋し亡影亡姿」

とあるのは、迎え火を焚いてゐる家で、その年のお盆に迎える佛の数が知られて、何となく暗然たる心持が湧いてくる。魂祭の終へた十五日の夕方には、同じように芋殻を焚く、これを送り火といひ、先にお迎えした精霊を送るのである。京都では、送り火を家ごとで焚かず、十六日の夜、東山如意ヶ嶽にある大文字、北山の妙法、西山の船、鳥居、左大文字などに點火して

「たらちねの母を送るか大文字」

といふように各家における送り火に代へてゐる。これは大文字の火影のうつるところに、お盆に歸つて來られたなつかしい亡きお母様のお淨土へ歸られる姿が見られると傳へられてゐるものであり、

「相阿彌の宵寝起すや大文字」

とある如く、京都の人は、必ず表に出て、この送り火を拜して亡き人を偲ぶすがとし、私共に何といふことなしに、ゆかしいひびきを與へてくれるものである。

この迎え火、送り火といふことは、報恩經に「七月十四日卯の刻に來り、十六日の午の時に歸る」とあるに基くものようであるが、我が國では前に述べたように、迎え火は十三日、送り火は十五日の夕方に焚き、京都だけは送り火を十六日の夜にしてゐる。報恩經は、どうも支那で、何れの時代にか作られた經典であるから、もとより金科玉條とは致しがたい。従つてこの起原は不明といふことになるが、どうもこれは、道教の影響に依るものの如く、この間の消息は、五椎姐と

いふ支那の書物に面白く書かれてゐる。

魂棚をかざる芋がら、白黄の茄子、まこも、燈籠、草花など、あらゆるものを賣るために、七月十二日から十三日の朝にかけて、町々に設けられる一群を草市又は盆市と呼んでゐる。この市の有様は

「先づ包ふまこもむしろや草の市」

「草市の草にまじりて芋がらかな」

「白茄子草市以後は終に見ず」、「草市ではかなきものを値切りつめ」などと、俳諧子や川柳子を賑はす種子となつてゐて、頗る興味深いものがある。

棚 經

孟蘭盆會の行はるる十三日から十五日にかけて、我が國では、眞宗を除いては何れの宗旨でも檀家の戸別訪問を行つて讀經をやつてゐる、魂棚、精靈棚の前で讀經するから棚經といふのである。風俗文選に

「家にむかい火たきすてて魂祭る頃、檀那寺の小僧、棚經とてよみあらく」

とある、これによると棚經は十三日に迎え火を焚いて翌十四日から行つたことを知られるが、此の頃では十三日からやつてゐる。これは昔とちがつて、各寺々では、年とともに檀家が増加して來て二日間では廻り切れなくなつたためでもあり、又、一年一度の檀家訪問を残り

なくやるのに、時間不足を感じて三日間になつたものでもあろう。浮世床に

「むづかしい戒名をつけると、孫子の代には讀みようも知れず、讀經の坊さまに尋ねてもらひ」

とあり、川柳に

「靈棚に院號のないはづかしさ」

とあるのは、相當に雙方がくすぐつたい氣のする諷刺である。然らばこの棚經は何れの時代から、如何様にして始まつたか。今日、稱へてゐる棚經は徳川時代からで、織田信長の時代に、切支丹（基督教）が輸入され、徳川時代の始めには不穩な取沙汰さへ生ずるに至つたため幕府は、その弊を未然に防がんとし、國民精神總動員の一法として佛教を保護し、切支丹に徹底的な弾壓を加へ、僧侶と力を合せて佛教信仰を強制的に勧め、僧侶をして戸籍吏の役を勤めしむるために何れかの寺の檀家たらしめ、いはゆる宗門改めなることを行はしめて、絶えず現時行はるる國勢調査と似た信仰調査に依る帳簿上の調査と併行して行はしめたのが、棚經に名を假りた家宅檢索式の家庭に於ける信仰状態の徹底的な調査であつた。然しこれは一面から見ると、ずいぶんと極端な方法ではあつたが、佛教徒として報恩作業の一である。孟蘭盆經の教に従つて、魂まつりの時期にこれを行つたことは、誠に方法宜しきを得たもので、孟蘭盆會の精神を、我が國民の心に深く受け入れしめ、これによつて家ごとに佛教の信仰が奨励されたこととなつ

て、龜山櫻に「御佛に後生をまかせて此の世には、忠義はたらくたままつり」とある如く、忠孝一致を説く國民精神にびつたりと合ふ、善い習慣となつたのでこの美風は、時局柄、もつと／＼盛にして行く方法を講じなければならぬものである。

この信仰調査、家宅捜査に名を假る棚經の開始は何年前からであつたか、憲教類典によると寛文年中とある。ところで、方法は根本的に相違あるがこの棚經の形式は、徳川時代の創案であるかといふと、決してそうではない。僧侶が信者の家のある一定の時期に巡回して讀經したのは平安朝からで、この習慣は室町時代まで繼續せられてゐた佛



犬

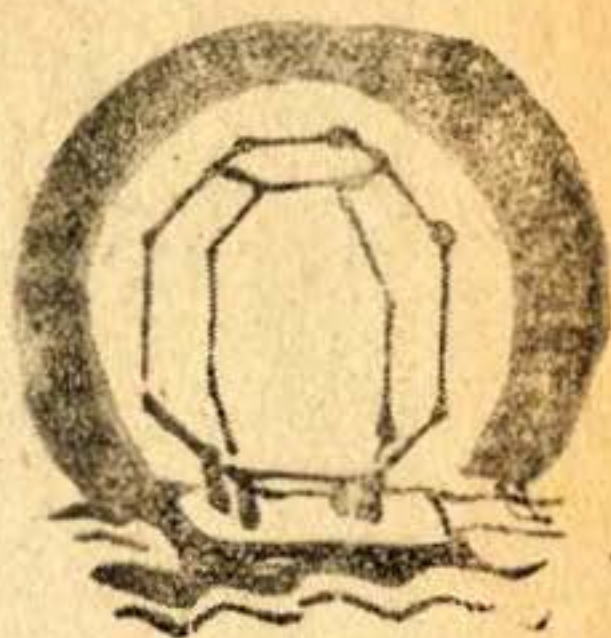
海老原廣作攝

名會の形式と本質とが改められたものである。

佛名會といふ法會は、三千佛名經の所設に従ひ、毎年十二月になると一夜又は三夜に亘り、過去・現在・未來三世に亘る三千佛の御名を唱へて禮拜し、一年中に記した罪惡に懺悔して更生の意氣と明朗な氣分で新年を迎えむとするために行ふ法會で、我が國では淳和天皇の天長七年始めて宮中で行はせられ、越へて承和五年には、歳旦に國家の泰平を祈るために宮中で行はせらるゝ御齋會に對し、晩歲には一年中の惡事消滅を祈願する恒例の法會として定められ爾來、宮中ばかりでなく、諸國の國司に行はしめ、又、家々でも行はれるようになつた。兼盛家集に

「かじふれば我が身につまる年月を、おくりむかふと何いそぐらん」とあるが、この歌の詞書には佛名會する家とあつて、老僧が、甲乙丙丁等々の家々から佛名會に招かれて、たとへ「棚經や出でて氣のつく門ちがひ」

といふほどなくとも、如何に年の暮に老僧がいそがしく信者の罪障懺悔のために朝からおそくまで廻つてゐるかが、手にとるように見える。今日、行はれてゐる棚經は、この佛名會に依る巡回讀經が、利用更生されたもので、徳川時代以後、佛名會は、その形式だけが各寺に残されて、今日に及んでゐる。



燈

籠

佐賀一海

「平家物語」をひらいたことのある人は、誰も小松殿平重盛が燈籠大臣と呼ばれる章を記憶に留めてゐるであらう。諸行無常の世を嘆いた重盛は、東山の麓に六八弘誓の願になぞらへて、四十八間の精舎を建立し、一間に一つづつ、四十八の燈籠をしつらへて、その光明のもとに淨土を願求したとかゝれてゐる。

わたしたちは子供のときから燈籠に親しむ國に育つて來た。石燈籠は寺院の境内にあるばかりではない、民家の庭園にまで行き亘つてゐる。本で造つた春日燈籠は神社にある。金屬製の釣燈籠は佛間を照す。いまかいた重盛の燈籠はこの釣燈籠であつたらう。お盆が來ると迎ひ火を焚き、田舎では墓地に綱を張つて數へきれないほどの提灯を吊す。一軒の墓所にその火の數が多いほど佛への孝養があついのだと云はれてゐる。あれも燈籠供養のひとつだ。燈籠で思ひだすのは明治になつて圓朝がつくつた怪談牡丹燈籠だ。あれなどお盆興行の芝居に、夏なほさむい因縁話をしみじみ味はされて、まことにふさはしい

ものではないか。

いつたい、火のあかりと佛教とはどんな結びつきがあるのだらうか。古來、火を崇拜する宗教は多い。印度に例をとれば、佛教以前の婆羅門教は特に火を崇拜した。火は第一に萬物を燃燒する。不盡である。第二に萬物を照曜する。この二つを効をとつても古代人の信仰心がわかるであらう。釋尊は佛教を宣揚されてからも僧房に於ける燃燈供養をしきりに勸説した。「普廣經」は、「佛前にて燈明を献ずれば忽ち幽冥界にて苦者が休息をうる」と語つてゐる。さうしてこの燃燈の器具である燈籠も釋尊在世のときに出來たのである。はじめは僧房の器具であつたものが後に佛前の供具となつたことは云ふまでもないが、「毘奈耶雜事十三」には次のやうないはれが語られてゐる。夏の或晩、一人の比丘が明りを灯した。配が火にとびこんで焼けた。それを目のあたりにした佛は比丘に向つて燈籠を作れと命じた。比丘は燈

籠とは何でせうかと訊き返した。すると佛は、竹ぎれをあつめて籠をつくり火を燃ふのだ、竹が手に入らなかつたら雲母でいい、それも出来ないうら土の籠をつくつて周圍に小孔を設ける百目でいい、と云はれた。しかし比丘はますます不可解なので、佛は瓦師に命じて百目燈籠をつくらせたのである。これが燈籠の起源だ。

そのあかりは、印度では勿論油火を使用した。蠟燭は支那の隋・唐からはじまつたといはれてゐるが、わが國では油火を盛んに用ゐる蠟燭を使つたのは文祿以後であるらしい。「古書義解」に、「油火を燈とし、蠟火を燭とす」とあるが、それまでは蠟燭がなかつたやうだ。

燈籠がはじめてわが國におめ見えたのは聖德太子頃大和の觀福寺にかざられた所謂觀福寺型燈籠がそれであらう。「燈明は如來の光明により煩惱の暗黒を照破する義也」大日經「諸佛に明暗あらば夜豈じて晝滅すべきも佛に明暗なきが故に晝夜を問はず晝火する也」(資持記)

——かうした光明信仰の對象たるあかりがわが國の佛教界に悉ちの間ひひろまつて行つたことは云ふまでもない。行事としては平安朝初期に、すでに東大寺の「萬燈會」法會となつてあらはれ、次いで四天王寺、法隆寺などの法要に行はれてゐる。またその光明を永劫に絶やさぬ信仰から、常燈明(長明燈)の設けが出来た。觀山根本中堂には傳教大師以來の常燈明が、いまもなほ燃えつづけてゐる。高野には燈籠堂があつて、これに數十の常燈明が輝いてゐる。

わたしたちは「貧者の一燈」の美しい話を聞いてゐる。釋尊が或時

阿闍世王の請招によつて王宮で說法し、夜更けて祇園精舎に戻らうとすると、豫め王の命によつて王宮から精舎までの道には、かぎりない燈明が點ぜられ、燃燈供養が釋尊を待ちうけてゐたのである。そこへ貧しい一老婆がどこからともなく現はれ來つて、釋尊の前にひれ伏しながら小さな一燈を獻じた。すると、みよ、ふしぎなことには、あとで萬燈悉く消え去つた後も、この老婆の捧げた一燈ばかりは燃えつづけて消え絶えることがなかつた。釋尊は目蓮を顧みて次のやうに云はれたといふ。「老婆、三十劫の後、作佛して須彌燈如來となる。」わが國の話では、弘法大師入定するとき、和泉の一貧女が高野にのぼらうとしたが、女人禁制の掟固く、一小燈を誠心籠て獻じたまま途中から引返した。ところが貧女の一心微り、その燈明は奥の院に至つて千年の後までも尚、ありし昔のとおりに輝いてゐると傳へられてゐる。お盆が來ると、盆踊りに老若男女の心をそゝる。それにつけて燈籠に因んだ踊りが無いものだらうか。在る。念佛踊の一種の燈籠踊がそれだ。その起源は延寶頃といふから綱吉が五代將軍になつた時代である。洛北、岩見花園の二村に行はれたのをはじめとする。女子は種々趣向をこらした燈籠を頭に戴き、男子は太鼓、笛を鳴し、六字念佛に節をつけてうたひながら、その年死亡した者のある家を順廻して夜更まで踊り歩くのである。

南無阿彌陀佛を歌によみ、新亡趣向が踊りとなるこの燈籠踊こそ、お盆の踊りの脈絡ではなからうか。



精

靈

棚

中村 康隆

「魂棚や初朝顔を鉢のまま（雄風）」と、手向けする日頃になった。七夕から盂蘭盆と續く幾朝夕位懐しい日頃も少ないであらう。俗に盆蛸蛉、精靈蛸蛉と呼ばれる、あの赤といぼが夕焼空に飛廻る頃。浴衣姿に團扇を片手にし、焚込めた蚊遣り避けて縁臺に將基指す頃。七夕・精靈棚・精靈火・盆踊・燈籠・盆送り・盆籠・盆綱曳・簀入等・と數へたてると、全く此の月位印象的な月も少ない。正月と共に忘れ難い多彩な魅惑を惹起す月である。忙しいことの形容として「盆と正月」が引出されるやうに、この二者は我々の生活史にとつて此の上なく重要な一齣である。若し我々が村々町々の年中行事の言葉を編むならば、その生活暦にとつて殆んど此の二者の前後での用語が、その大部をうづめることに驚くであらう。今春刊行の「歳時習俗語彙」の編者は、序文中、行事が此の二季節に集中された幾つかの理由を考へられてゐるが、私は何よりも此の二つの節日が、春秋二季の變り目の儀禮であ

つたことに、その最大最要の理由があると考へる。

今は殆んど生者と死者との別々の祭儀かの如く解されるが、兩者の祭儀構成には意外な迄甚だしい類同——例へば十一日の若木迎と盆花迎、七日益と七日正月、十六日の簀入、歳市と盆市、年棚と盆棚、歳暮・年玉と盆禮・生身玉、祝箸と盆箸、麥麵と索麵、トンド焚と盆籠など——が存し、それは單に祭儀の同一機構性許りからは理解出来な

いことで、元來兩者が同一の構造・意義・役割を有するものなるを示してゐやう。

これが春秋二季の變り目に行はれたのは、我々の祖先たちの最も古い曆には元來此の季節しかなかつたからに依るのだと思ふ。そして此の最重要な生活轉換時たる二季節には、神や靈達が我々人間社會へと來訪するのだ、と彼等は考へた。此の來訪する神や靈を饗應して彼等の生活の淨福を祈るのが、此の二季の祭儀なのであつた。魂祭も今は

盆に限られてるかの感を興へるが、昔は歳暮に盛んに行はれたことは（今でも一部には行はれてゐる）、十二月の異名師走の語に依つても想像出來やう。正月の獅子舞なども全く此の神の來訪を示す貌で、あれが來ぬと正月の來た氣になれぬのが一般の風であつた。

一體踊りは、日本のやうな巫者の宗教所謂巫教の支配してゐる處では、宗教の最重要部分で、降靈・神憑りの一手段とされ、此の踊りの陶醉境に於て神人間の靈的交通と融和とが實現せられるといふのである。盆踊りも後には單に娛樂的機關と化したか、かゝる意味を含む行事であつたらう。盆月が「踊り月」と異名されるのは、何よりもよく此の月こそ神靈達と人々との、從つて亦人間相互間の精神的和合の果される時期であることを示してゐると思ふ。

それならば、どうして斯様に盆月が正月よりも更に靈を祭るに相應しい月のやうになつたかといふと、春秋の交ふ季節たる盆月こそ、稲の穂の出る頃とて農業開始の準備期たる正月よりも一層濃い生活不安を伴ふ時期と感ぜられたからである。かゝる時期なればこそ、田遊び（田歌舞）の行事や七夕祭、七度浴びとかねふた流しなどが行はれて、斯る生の不安を追拂ひ、災禍と惡靈とを拂擯しようとした、と考へられる。

七夕は、今でこそ陽月陽日の七七の夜夕の祭の意で、七夕と當字するが、元來は文字通り「棚機」であつたといふ。後世、七夕は通常牽牛織女二星の交會祭とし、女子の手技の巧くなるやうにと祈る所謂乞

巧奠ともされ、又農家では稻田の稔りを願ふ星祭ともされたが、初めには全く季節的な交叉祭であつて、折口博士に依ると、日本の古代にあつては、此の夏秋の交叉の頃、少女が邑落離れた處に設けられた棚の上に隔離されて、海や川などを傳はつて訪れ來る異郷の若神達の爲に機を織つて待つて居たのだといふ。かくて、この交叉祭に於る神婚の祭儀の形式を通して異郷人との原始的交易、贈答及び交通がなされた。市廛（市機）の語の由來もこゝにある。藏も藏棚即ち眞座なる棚の略で、始めは地上に柱を立てその脚の上に板を擧げて此の棚に五穀や守護神（珠で御藏板舉と呼ばれた）を据ゑて假屋根を結ぶ程度であつた。此の屋根のないのが棧敷（さいじき）で、特にその脚柱の高くなつたのがヤグラである。一時的な訪れる神や靈を迎へる棚は簡單なのでよく、多くは一方を崖により柱を水中などに立てた「棧」の形式で、また櫓殿とも言つた形式であつた。天湯河板舉、棚橋等呼ぶ類も此の仕方である。年神棚は天井から吊下げた板で、やはり神の座と見られた。かやうな棚に種々の野山の産物等を並べ立てるのは、全く古書に見る所の「神迎へ」の形式なのである。かく、七夕が、最初には季節的交叉祭として、棚に機織つ女を置いて、訪れる神々に布帛や其他の産物の贈物をなし、そのお返しとして産物の豐饒と生活の安寧とを祈つたものであるので、今にも此の祭りの中心點は、笹竹を立て机を置いて種々の供物を並べて空の神々を祈ることにある。笹竹は機の本でも構はなく、つまりは神々の「憑り座」の木を立てる意味で、

やはり神迎への様式なのである。七夕に飾る薬や眞菰製の馬(七夕馬、眞菰馬、ガツギ馬、草刈馬などと呼ばれる)も七夕標の騎る馬とされ、越後北蒲原などでは田の神が是に乗つて田巡りされるのだといふやうな例は、全く今でも訪れる神を迎へ款待す儀禮と考へてゐることを示してゐる。田の神は田植祭に歌はれる田歌にさんばい又はさんばえと呼ばれるものであるが、東石見田歌に「さんばいは三度祭る神やれ、歳徳織女、三度まつりて田畠の神と」とあり、十月前後にその送り迎へ行事をされる田の神も正月の年神及び七夕神も同じ神と心得られたと見える。さんばいは散飯の神即ち食物神(饗受媛)といふ説もあるが、佛教の散飯は鬼神衆生への施與食の謂であるから、人生社會の禍福吉凶は一にその作用に依ると信ぜられたところの神靈達を指したものであらう。この神靈が季節的交叉の折に人間の社會に訪れ來ると考へられた。

お盆の行事も、全く同じ構造である。盆棚を飾り盆供物を揃え精霊火を焚いて、訪れる靈達をお迎へし丁寧に饗應し數々の作物などの贈物をし靈送りしてお歸りをねがひ、生活の安寧、産物の豊穰を願ひ、子孫の家の繁榮を祈るといふのが、その最要の骨子である。されば、盆も七夕も同一祭儀の一連鎖であることは明瞭であらう。實際、兩者の儀式、供物の相似は、「歳時習俗語彙」に記す如く、擺り瓜茄子の牛馬だけではなく、七夕祭にも棚を軒下に組立てて之を七夕棚といふ處があると同時に、盆の魂祭にも棚を設けず新竹を立ててそれに繩を渡

し色々の供物を引掛けて供へる例もあり、また七夕送り(七夕流し)の方式も甚だ盆送り(精霊流し)と一致してゐる。兩者を區別するのは、七夕祭の轉化によるもので、元來は七夕が盆の一節であつたのである。七夕は盆祭の口開け儀禮といふべきものであつた(この事はメラネシア邊の習俗と吻合すれば一層明白である)。

それなら、何故、七夕が單なる秋萩祭、農業的呪術祭、織女祭等として殘存するに過ぎず、次第に寂れてゆくのに反し、盆祭がそれと別個の習俗であるかの如き外觀を以て盛んに行はれてゐるのかといふに、全くそれは佛教的止揚、改革に依るに外ならない。即ちそれが祖靈及び萬靈供養の形式を以て、深く國民の祖先崇拜及び同胞主義と結びついてゐるからなのである。そして此の習俗を通して、人々は、誠意から人の子としてなすべき祖靈死靈への孝養の義務を果し、生活仲間の融合を計り、更に棚經や寺詣り墓詣り等からする佛教への近接と信仰増進とを冥々裡に成遂げ、不知不識その精神生活を豊富にし得たのであつた。

盆棚(精霊棚、先祖棚)は、通常、十三日早朝にしつらへ、花供物を飾る。多くは佛間の次の間とか佛壇の隣とかに、二本又は四本の竹の柱(精霊竹)を立て、組み、茅萱や芋の繩又は左纏りの注連繩を張り廻らして、是に酸漿や大角豆、枝豆などの種々の果物瓜類や稻穂などを掛け、又素懸などを吊したりし、中には色紙の幣を垂れたりする處もある。佛壇の位牌がこの棚に移し直される(だから盆棚飾りのこ

とを佛なはいと呼ぶ所もある。概して、十一日頃の盆花迎へで用意された盆花が飾られる。桔梗、萩、女郎花、山撫子、山百合、千屈菜、馬棘、酸漿等の類で、千屈菜は水向けに用ひられるので、特に水掛草とも言はれる位である。盆花、盆飾り等は、近世には多く十二日夜から十三日朝の間開かれる草市(盆市、花市)で求められるが、それをも佛様迎へと考へてゐる所もある(八戸邊)此の時買はれる盆供物に佛様の背負籠・杖・舟・鏡(即ち毘布、河骨の根莖、百合根、心太)などいふのがある佛の鏡は鏡餅と比すべきだが、これも年越麥麴と比べてよい索籠をば負籠索籠と呼ぶ處もある。靈達が土産の供物をこれで束ね肩に負うて歸るといふのである。胡瓜の馬と茄子の牛も盆の棚飾りには缺くべからざるものである。川柳歌の「靈棚の牛は島の鼻まがり」は微笑ましい傑作であるが、これには七夕馬と同様眞菰馬を造る處もある程で、これに騎つて靈達が來訪し歸りゆくと思はれ、この牛馬を十三日夕には内向きに十五日には外向きにしたり、又芋藪の梯子をかけたたりもする。芋藪は千屈菜の莖と共に、盆箸、精靈箸にも供へられる。盆箸は精靈用許りでなく、人間も亦た正月の祝箸の如く、楊などで製した盆箸として盆中の食事に用ひることもある。惡靈の秋摘、除災招福の意味である。瓜茄子は牛馬丈でなく、靈達の食物ともいふべき水の子、水の物などいはれて、細かく賽の目に刻んだもの(洗米をも交へたりする)を、蓮の葉に盛つて供へたりする。その外の供物としてお棚菓子(餅)を供へる處もあるが團子、索籠等が最も缺くべからざるもの

とされ、新盆の家への所謂盆義理には特に索籠が用ひられる。索籠は七夕祭にも不可欠なので、それは高辛氏乃至顯祖氏の子が此の日に死んで惡鬼となり江水にゐて人を悩ますに依て此日索籠を以て祭り人も亦たそれを食せば此鬼につかれて禍を被る事を免れるといふ傳説に基づく支那の民間信仰を受けついだものと言はれるが、盆棚のが索籠だとする見方は日本風である。團子も靈達の送り迎への爲に必要とされ、之を待團子、落付き團子(十三日)とか、送り團子、家包團子(十五日)とか言つて供へ、隱岐では之を迎馬送馬とさへ呼んでゐるといふ。又團子の代りに餅を用ひる所もある。此等の外、盆棚には必ず水鉢が置かれ、千屈菜などの小枝で、拜禮の度に水向けされる。水を手向ける外に、御茶湯を上げる風もあり、その特に盛んなのは攝津の池田地方で御茶湯兒と呼ぶ子供の番を置いて一日に五十回以上も取替へさせるといふ。

「魂棚をほどけばもとの座敷かな」と詠まれてゐるやうに、中には魂棚の周圍に障子を立廻して一坪程の精靈部屋を設ける處もあり、かと思ふと、盆棚を別にしつらへることなく平常の佛壇に飾るものもある。何れにせよ、之等の盆棚飾りは、訪れる靈達を心より送迎し供養する心の象徴と言へやう。まことに、

山城の瓜や茄子をそのまゝに

手向となれや賀茂川の水(一休)

で、此の時節の日本は國土を擧げて、今は亡き古人の靈に對し、その

お蔭を感謝し更に行末永き國土の守護たらんことを祈つてゐるのである。

以上の外に、尙ほ一二特殊な例がある。即ち荒棚と無縁棚とがそれである。

無縁棚は、無縁乃至未婚者の靈などとされ、餓鬼どん、無縁さん、外精靈（九州、沖縄、一切精靈（美濃）、三界萬靈（豊岐）などと呼び、屋外、門前、軒先、庭前乃至は墓地等に特別に棚を設け、無縁棚、餓鬼棚、門棚、水棚などと呼びなしてゐる。處に依つては室内佛壇脇に別にしつらへたり、盆棚下に設けたり、或は特に供物丈でも別にする處もある。餓鬼飯と呼ぶ如きその爲の供物である。中には家のほとけの外に盆膳を牛馬様に供へる所（相州）もあり、習俗語彙の編者が例の瓜茄子の牛馬も本來この無縁の精靈を送迎する設けと見てゐるのは當つてゐやう。

棚は、新亡、新精靈、荒精靈、若精靈などと呼ばれる新盆の靈達の爲に縁側や軒先門前などに特に大きく丁寧に設けたりする。近邊では青竹を柱として一坪程の棚を作り檜の枝葉等で周りを圍ひ、棚の高さを四五尺とし葎や細い竹の籠子を作つて掛け、伊豆邊では精靈又は佛の腰掛けと稱する軒先に男竹を柱とし周を杉の青葉で飾つた特別の棚を新盆の家で作る。今年竹や青葉は如何にも新亡の靈に相應はしい。

荒棚と無縁棚とに對する古風な思想にはどこか共通した點が見られ、寧ろ盆も師走も始源的には斯る靈が祭りの主要對象であつたかの節が多い。之等は年久しい祖先の和魂に比すると、荒魂と呼ばれるべき、何かにつけ宥和の手段を講ぜねば荒ぶる魂と考へてゐたやうである。しかし佛教の教は、縁者無縁者を問はず、迷へる魂の救済を問題とし、此の救済が、供養者の誠意こめた追善に於て果たされるといふのである。佛教の盂蘭盆説話は全くその意味なのである。

いざさらば我等が魂をこめて訪れる祖靈、新亡の靈達に供養しまつらう。

魂棚の奥なつかしや親の顔（去來）
夢に見るも魂棚近く寝し夜哉（關更）
魂棚は靈も泪も油かな（嵐雪）

今年の盆にも亦た幾人の人が餓りも新しい精靈棚の前に、父を母を子を妻を夫を、兄弟姉妹や縁者達を、偲んでは泪し慟克しつつ念誦の宵々を過されることであらう。別しては數多き護國の英靈を供養し奉らう。今は靖國の神とし天翔ける靈に對しては、如意ヶ嶽を埋める大文字火も充分とは言ひ得まい。ただひたに合掌念誦しつつ心より手向けまつるのみである。





大別山燈火ぞ見ゆれ、馬小屋の寒
氣にわれら夕酌取る頃
中支派連軍 新田正治

意情な安適な生活からは眞に人の心
を動かす迫力のある歌は生れぬもの
であることとを、私達はこの歌を見て
感ずる。眞實な緊迫した高度の情
神から生れた歌は、やさしい高度の情
形式を取つてゐても、猶、閃光のや
うに人の心を射しとほす。大別山の
突撃戦にある馬軍の一兵が、やがて
小屋にしばし休らひながら、馬が
る感に満ちた歌である。
富山縣 館井 雨 水

遅しきつはものたちが浴みせりせ
まらぬさまにあるがたのもし（寫
眞を見て）
銃後の國民は前線の將兵の勞苦をい
つも念頭に置いてゐる。たまたま新
聞の通信が何かに小間を得た兵士た
ちの占領地に於ける入浴の寫眞を見
てホツとした氣持を歌つたのは見え
しきもの。
東京市 三野輪 幸太郎

の濱に漁船あまたならびゐて白馬
に似たる荒波の寄る
荒天の前夜の寫生であらう。沙
濱に全部引上げられた漁船、それ
に白波の浪子を詠んだもの。併し表
に今少し強みと力があつてよい。
朝 露 江 八 年 坊

樂しみは木魚を叩き南無ほとけ南

無阿彌陀佛と申すその時
北海通 押野 尙 秀

子らと云へど幼けなくしてわが泣
けば共に泣くなる頼りなさにて
千葉縣 安田 保 治

師のみ墓洗へば御名の一字づつ現
れにけり苔の下より
大阪市 松尾 いく子

み佛に折りてたむけんわが庭にひ
らきそめたる芍薬の花
大阪府 辻 惣三郎

若人らけふの一日を櫛原の宮居に
仕へ清き土盛る
中支派連軍 岡庭 五十吉

敵前の草のしとねに銃取れば露の
光りて明の月てる
兵庫縣 渡邊 眞 行

ふるさとに松の聲のみ聞きなれて
風吹かぬ日は寂しかりけり
山口縣 満 永 文 正

故郷にわが歸り来る夕ぐれは蛙さ
びしく鳴きわたるかも
北海道 寺 田 眞 山

天津日の惠の露にぬれながら今朝
咲きそむる常夏の花

高崎陸軍病院 小平 勇一

吾が植ゑし庭の椿の咲きたりとた
よりして來ぬ妹の文
福岡縣 三浦 啓子

漸くに春の來ぬとて書きおこす征
旅のたより寂しかりけり
長門縣 宮 澤 圭 子

起きよとてかん高き鳥わが聞の林
に啼けば伊那郡白む
東京市 百 登 生

壺えやらぬ子のいたつきの悲しけ
どただいたづらに泣きてあるべき
東京市 小泉 妙 春

若き日の望はたして清く老いおん
すこやかにおはします君へ友の六
十一の賀に
京都府 馬 野 智 善

大君にささげし夫と云ひつつもお
さなき子等に妻は泣くらん
大阪府 渡邊 明 道

最徐行白衣の勇士あまたゆく車に
むきて熟きもの湧く
京都府 水 田 七 郎

山青く流に臨める鹽田の遠ほの白
し雪をなした
千葉縣 高橋 美 也 子

若葉森あかねに染みて初夏の日は
今海に入らんとすなり
東京市 木 全 哭 詩

老いぬればすべてを夢と見なしつ
つ朝な夕なに經學ぶかな
小倉市 益 田 眞 光

たまぼこの血もて立てたる功を

つつむ白衣の人のゆかしさ
東京市 柏 木 し ん

ぬかづきて其のままに御名呼べば
風がもて來る亡き人の聲
和歌山縣 松尾 泰 道

み佛の法とこそ聞け歌をよむ蛙の
聲も松風の音も
中野區 三 浦 眞 子

長き長き貨車ゆく見つつ山いくつ
はるけき遠のふるさとを戀ふ
和歌山 奥 村 映 水

銃後守り老いを忘れて小山田に七
ふむ祖父の若やかにして
小樽 平 井 正 金

わかれゆく覺悟の固くものふは
笑みをふくみて征くぞ嬉しき
京都府 岡島 孝 治 郎

大校威永久にかがやく宮居をば仰
ぐこの日に逢へるものかな
奇森縣 丸 尾 傳 山

戦場の露と消えにしますらをの菩
提のためと念佛しにけり
北海道 花 月 蘭 住

しめやかに門火をたきてそれぞれ
のゆかりのみたま迎へけるかな
大阪府 木 全 澄 子

大神の宮居の前にぬかづきて幸多
き身を嬉しくぞ思ふ

投稿規定

官製はがきに一四二首以内
とし一筆一編部歌壇係
あて送ること



筆隨の山

山やまの「渡り鳥達」わたどりたち

青柳

優

先日、北支の野戦病院で近くなつた友人の富山雅夫は、山が好きで、山の話をしてゐると、段々眼の色の變つてくる男であつた。よく暇をこしらへては方々の山へ出掛けて行つた。かれの登山の経験も、最初の登高主義から、次第に低山、溪谷などの低徊主義に落ちて行つたやうである。かうした傾向は、山を愛する登山家達によく見られる。最初は高い山岳、危険なコースなどを征服することに興味を持つが、随て人の道入らない溪谷などを黙々と歩くやうになる。

かれは山へ行くと、必ずその繪葉書で簡単な便りをくれた、次に逢つたとき、『山はどうだつた?』と訊くと、いつも決つて、ニ

ヤツと羞しさに笑つて、『ふう』と間伸びした溜息のやうな聲を出すのであつた。どちらかといふと話好きの性質だつたが、山から歸つた當座は、幾分言葉少なくなるやうであつた。かれは都會人らしい神經で絶えず何かを求め、また絶えず憩ひの場所を求めてゐるやうであつた。また言ひかへると、人懐っこい一面、激しい孤獨への渴望につき纏はれてゐた。

考へて見ると、これはあながち富山雅夫ひとりの感情ではないやうである。近代都會人の磨きすまされた觀念が、いつもぎり／＼につきつめて落着きもなく疲れてゐるのだ。近代の始祖といはれる北歐の文豪イブセンに

「ブランド」といふ戯曲がある。その主人公ブランドは、峻厳な意志を徹して神を見やうとして、たゞ一人氷の山に登つて行き身を果てる。「一切が無か」といふのがかれの思想なのだが、陋巷に塗れたわれ／＼の日常生活のなかでも、時にそのやうな激しい渴仰心に憑かれることがある。

山登りをする人々の心理作用はそんなところに在ると思ふ。激しい呼吸抜きを求めてゆく。日本アルプスの槍ヶ嶽の頂上や白馬嶽の上で、今まで喘ぎ喘ぎ登つて来た人達が、大きな聲を上げて叫んだり、意味もなくげら／＼と笑つたり、妙に沈黙して了つたりするのを見かける。肉體の疲労や、緊張が緩んだといふだけではなく、心理的な結滞がほぐれて、一種の虚脱状態になるのだ。

山を下つた當座は、げつそりした氣持になるが、暫くすると、山での自然の風物や新鮮な空氣の感觸が甦つてくる。それは剪り立ての果物のやうな甘美な魅化をもつて迫つて來、纏てその人をそっくり裹にしてしふので

ある。

山好きの人、釣り好きの人などに、山や釣りの効能を述べさせれば、いくらでも捲し立てるに違ひないが、どれも適確ではない。その人々は、自分が山なり釣りなりに憑かれてゐる境地を他人に傳へ得ないもどかしさで辯じ立てるのだが、いくら口で言つても、所詮、何事に就いても言へることだが、その道に進入らない人には、通じない氣持であらう。そんなことから眞の登山家は山を語らず、釣師は釣を語らずといふことになる。

梅雨空が明けて、雪を頂いた山の稜線が、青空の中にくつきりと響き出されるやうになると、山小屋の人達、山案内人達は一齊に山に集つてくる。去年の雪國ひを除けたり、雪崩に傷んだ箇所を修理したり、食料品や薪炭類を運び込む。

ウインバーの「アルプス登覽記」を讀むと、山のホテルの前には、夕方になると有名な山案内人達が、道傍の石に腰をかけて、話をしたり、パイプをくわえたりして、お客を

待つてゐることが書いてある。今年も調染の登山者が來ないだらうかと待つてゐるのである。マッターホルンを背景にしてホテルの前の廣場は、夕方になると、各國から集つた登山家やガイド達のクラブになるといふ。

我國でも白馬嶽とか槍ヶ嶽、上高地などでは、纔にそんな俤が見られる。毎年山初めになると決つてやつてくる調染客が五人や十人は、どの小屋にもあるものだ。

小屋の下雪溪へ來ると、おーいと遠くから呼ぶ、またきたやうと言ふ。山小屋の人達は、あゝまた渡り鳥が來たよと言ふ。毎年同じ時季に必ずやつてくるからである。

それから一週間ばかり、その小屋を根城にして、附近の岩壁や溪を渉り歩き、眞黒になつて、またぶいと歸つて行つて了ふ。歸つてゆく後姿を見送りながら、山男達までが、得應の知れない人だねえと呟くのだ。

所謂有名な登山家達のうちには、却々入釜しい人が居て、山小屋の食物のこと、寢具のこと、待遇のことなどを口小言を言ひ、ヨー

ロツパアルプスの山莊の例を引いたりして、鈍い顔をした山小屋の親爺を相手に蘊蓄を披瀝し、頼まれもしないのに山小屋經營の顧問のやうなことを言ひ、しまいには山を自分のものゝやうな顔をし初めるものだが、この「渡り島」達は、圓爐裏傍で薄い布嚢を引つ絞つて眠り、一言も不平を言はず、我が家に歸つたやうに寛いでゐる。

日本アルプスの穂高嶽は、標高一萬尺を超え、危険な場所の多いことで有名な山である。併も岩石が風化してゐて、場所によつては絶えずガラ／＼崩れてゐるのだ。それだけに登山家達にとつては魅力の大きい山でもある。普通の登山路を通ればたいしたことないが今までに既に十幾人かの遭難者を出してゐる。しかし毎年熟練した登山家達は岩壁登攀の高度な技術を習得しに困難な場所を撰んで此處へ集まつてくる。

この穂高嶽の一隅に屏風岩といふのがあゝる。上高地から槍ヶ嶽へゆく途中で左側に見える屹立した、殆んど直角に近い、五百米

と三百米位との二段に分かれた岩壁である。登山家達はいつも怨めしうに横目で睨んで通るのだが、まだこの屏風岩を真正面から登つた人はないとの事である。

十年程以前のことだが、K醫大の學生が一人で上高地の案内人組合の小屋へやつて來て、これから屏風岩を登るが一週間経つて僕が歸つてこなかつたら學校へ通知してくれと言ひ遣し、人々の切りに止めるのも肯かずに出て行つた。案の狀、一週間経つても歸つて來ないので、學校へ電報が打たれ搜索隊が繰り出された。

私もその當時上高地に居たので、搜索隊に加はつて行つた。屏風岩は下から見ただけでも眼のくらみさうな絶壁である。登つた後には赤い布れをつけておくからといふ、その學生の言葉を頼りに、人々は替る々々岩壁を双眼鏡でくまなく探して行つた。

小半日程探した頃、あつた！と双眼鏡を覗いてゐる男が頓狂な叫びを擧げた。皆がどれどれと双眼鏡の周りに集り、次々に双眼鏡を

受け取り覗いて見ては、黙つて次に渡した。絶壁に僅かに斜に生えてゐる灌木の枝にかすかに赤い布れが懸つてゐる。全く人間業ではないのだ。やがて、發見した布れを便りに次々に赤い布れが探し出された。それはジクザクに曲つて上へ續いてゐる。一つの布れが見付かる度に、人々は双眼鏡を奪ひ合ひ、その學生の放れ業の跡に感嘆するのであつた。

前にも書いたやうにこの山の岩は風化してゐて手をかけると脆く崩れてくるのだ。或る場所では動く岩を支へる爲めに、近くに生えてゐる細い灌木の枝をそのまま折り曲げ、支へ棒にして居るところもあつた。赤い布れはそれでも斷續しながら、二段になつてゐる斷層を超えて、上部の岩壁に續いてゐる。それもまた斷續しながら殆んど頂上の遺ひ松の地帯にまでつゞいてゐるらしく見える。搜索隊の間に數隊が擧つた。頂上近くにかすかに見える赤い布れを双眼鏡に覗きながら、人々は口々に、やつたもんだねえと嘆息を發した。さうするとあの學生は頂上を向ふ側へ超え



て、何處かの温泉でのう／＼としてゐるのではないだらうか。

しかしそれは間違ひであつた。遭難してから十日目に屍體は、斷層になつた狭い岩帯の

上で發見された。丁度その學生が屏風岩へかゝつた日の午後三時過ぎに、穂高から上高地一帯に甚い雷雨があつた。頂上近くまで登つたその學生はもうちよつとのところで、豪雨の爲めに手足が凍え、墜落したのであらうと推定された。所持してゐたリュックサックは遂に發見されないで了つた。危険な岩攀りの途中で捨てたのが何處かの谷へ墜落して了つたのであらう。

山小屋の圍爐裏傍では、その學生の遭難が暫く話題にされた。暗いランプの下での話は兎角怪談染みるものだが、あのオーバーハング（懸崖）になつた岩壁に點々と遺された赤い布を見て來た人達は、思ひ出しただけで膚に寒氣を感じ、話をその方へ持つて行き勝ちであつた。

その時も、圍爐裏傍で學生の遭難の話になり、猿だつてあの眞似は出來ないよ、といふやうなことから、しまひに誰かゞあれは自殺ではないだらうかと言ひ出した、すると今まで毎年決つてやつて

くる例の「渡り鳥」の一人が、厄起になつて否定し初めた。その男も私達と一緒に搜索隊に加はつて行つたので、學生の登つた跡をいちいち岩攀りの専門語で説明しながら、あれは非常に科學的であつて不可能なことをやつたのではないと主張した。しかしあの學生は屏風へ登る前に三千圓の傷害保険を附けて行つたさうではないかと、また誰かゞ口を挟んだ。いつも無口でにこ／＼してゐるその「渡り鳥」は眞赤になり、ベソをかいいたやうに顔をゆがめ滅茶苦茶に怒り出した。お前達百姓や炭焼きに山登りの氣持が判つてたまふけえ。結局自殺だと言つた男が素直に取り消すと、急に羞し相な顔をし、しかしひどい冒険をやつたもんだなあ、と獨言のやりに呟いた。私は去年、久し振りで上高地で一夏を送つた。當時まだ學生だつたその男は相當な務め人らしくなり、相變らずまたにこ／＼しながらやつて來た。相變らずですわと言ふと、腐れ縁ですよと羞し相に笑ふのであつた。

歐洲大戦前の獨逸には、「渡り鳥」ハワン・グー・フ・オーデル運動といふのがあつた。自由な生活に憧れ、自然に還ること、を主張し、隊を組んで山嶽を踏破する、ロマンティックな青年運動であつた。

草市くさいちのころ

吉田 絃 二 郎

客を送つて門に出れば螢が飛んで來た。

空を仰げば欄干として北斗星がまたゝいてゐる。しみぐと孟蘭盆の近づいて來たことを感じる。

草市、迎火、たままつりなどといふ言葉を思ふだけでもなつかしい。

芭蕉翁は元祿七年伊賀上野から奈良に出で、さらに大阪に赴く途中、江戸の壽貞尼の計を聴いた。

數ならぬ身となおもひそ魂まつり

といふ句はそのをりのものである。

所縁あつてこの世界に人間と生まれ來た以上、どのやうな人も數ならぬ身とは思はれない。

壽貞尼は深川の芭蕉庵の面影を見てゐた不運な女性であつたらしい。次郎兵衛といふ男の子と他に二人の娘を女一人の手で育て上げた女であつたらしい。世間的にいへばかへり見るものでもない宿命の女であつたらしい。

かの女自身、自分をかすならぬ身と思ひもし、あきらめてもゐたであらう。

しかし芭蕉の眼にはかの女は決してかすならぬ身とは映つて來なかつた。貧しい俳人芭蕉のために衣を濯ぎ、米を炊いでくれた壽貞尼に對して、芭蕉は心からなる感謝をさゝげてゐたことであらう。

孟蘭盆には遠い世界からわたくしたちの父も母も妻も子も歸つて來ると思ふだけでもありがたい。

他人にとつては數ならぬ身のやうに想はれたであらうがわたくしたち自身にとつては、父も母も妻も子も決して數ならぬ身とは思はれない。それは芭蕉にとつて壽貞尼がさうでないのと同様である。

この世界に立ち還つて來るであらう一切の精靈たちはことごとく尊い佛性そのものである。

孟蘭盆ごとに、悉く光被せられたわが佛たちをおのれおの

れの家々に迎へることのできるうれしさを想ふ時、佛教國に生まれたありがたさを感じる。

かつては盂蘭盆ごとに母と妻とわたくしの三人がたそがれの門口に立つて迎火を焚き、珠數を爪繰り、遠い國の佛たちを迎へたが、やがては妻と二人のみで木立の下に迎火を焚くやうになつた。それも今ではわたくし一人で迎火を焚くやうになつた。

これがすべての人間の運命であるにちがひないが、尊くもあり、わびしくもある。

×

草市といふ名もゆかしいものである。

草酸漿、桔梗、女郎花、川原撫子、みそはぎ、玉蜀黍、蓮の花、ませがき、眞菰など夜露を帯びた夜の草市が想ひ出される。

鈴虫、松虫、響虫、草ひばり、かんたんの音を草市の人いされの中に聞けばすでに秋の近きを感じさへする。

このころは電燈の光りにつゝまれた草市を見るが、三十年くらゐ前まではアセチリン瓦斯か、石油ランプの下で草市であつた。草市の夜の更くるにつれて人の稀に、星の影のみ白々と牙ゆる。

恐らく新佛まつる母でもあらうか。洗ひ晒しの浴衣の身を

耻ぢてか、人目を忍ぶやうにいさゝかの花をもとめて宵暗の中に消えてゆく姿もあはれである。

×

わか佛けふはいづくの草枕
迎火は草のはつれのはつれ哉

かたみ子やはゝか來るとて手をたゞく（一茶）

佛蘭寺一茶の句である。

お盆が來ることに妻を亡ひ、子を失つた一茶のこの句を思ひ出すのはわたくし一人ではあるまい。

人の世のつゞくかぎり、人間は一茶と同じ思ひを経験しなければならぬ。

尊い悲しみである。尊い悟りである。尊い苦惱である。

いつもは現世的なことのみにあわたくし過してゐる人たちも、迎火を焚き、送火を焚く間だけは本然の靜心を取りもどすであらう。

夕暗の門口に佇み、珠數を爪繰り迎火を焚いて瞑默すればたしかに父の還り來る姿が心に映るであらう。母や妻や子の近づき來る聲も聞えるであらう。

見しこともないまたの世はわたくしにはわからない。しかし母も妻も靜かに還つて來るであらう。

わたくしは草市の人いきれの中からそつと暗い道を小急ぎ

にかへつて来た。

母も妻も玄關に立つてわたくしを待つてゐるやうな氣がしてならなかつたから。

わたくしは門をくゞつて、玄關のあたりを見まはした。表座敷の縁のあたりを見まはした。そこにはかつてありしまゝに岐阜提灯が懸されてゐた。夜露がしつとりと沓脱ぎの苔を濡らしてゐた。蟲の音も昔のまゝであつた。

夜が更けて行つた。月が出た。すべてが昔のまゝであつた。今宵たゞひとり誦經すれば、わたくし自身十萬億佛土のかなたの母とも妻とも相逢ふ以上の或るものを感じる。

今宵母も立ち還り、妻も還る。

今宵誦經すれば十萬億佛土の幽な佛たちの聲音を感じる。

このころ或る聖の『秋の雨の日は寂しいで』と仰せられたのを聞いた。

悟つても悟つても秋の雨の日の寂しさを忘れ給はぬ聖を尊く思ふ。

人間の世を寂しと思ふ弱い心の裡にこそ佛性はあるであらう。鳴立つ澤の秋の夕暮を寂しむ心の裡にこそ西行の歌はあつた。

人は毅然として強くなければならぬ。しかしそれとともに母を慕うて夕暮の門邊に泣いた童の心を失ふてはならぬ。

このごろ外國から訪ねて来て初めて逢つたT氏が、東京を立つ最後の夜銀座で鈴蟲を買つたといつて蟲籠に入れて持つて来てくれた。

鈴蟲は今夜も縁端で鳴いてゐる。

S氏は京都を見物し、宮島から雲仙、阿蘇を觀て、やがて神戸からアメリカに向ひ、アメリカの觀光をすまして大西洋を横切り北歐羅巴の故國に歸るといふことである。

鈴蟲のことが氣になると見え、京都からのたよりには『鈴蟲はまだ鳴いてゐるか』などと書いてあつた。

今夜も鈴蟲の聲を聞きながら氏のことを考へてゐる。

鈴蟲は無心にして鳴いてゐるのであらうが、鈴蟲の鳴いてゐるかぎり二つの心は何等かの交渉を感じてゐるであらう。

わたくしは人間の心と心の不思議さを思ふ。

生まれてはじめて逢ひ、そしてもう永遠に再び邂逅ふこともないであらう二つの心の交渉を。

鈴蟲はやがて死ぬであらう。

そしたら二つの心の交渉も終るであらうか。

否、否とわたくしは言ふ。

しかし秋が来て鈴蟲は死ぬであらう。

人間も亦。そして人間の心も亦。



盆栽作り餘談

石川保太郎

盆栽とは云つても時代の移りかはりで随分とはやりすたりのあるものです。しかし樹によつては昔からずつとすたらないものもあります。草物の菊、朝顔と同じ様に梅、松などは何時でも愛好者が絶えません。昨今では雑木と云はず常緑樹と云はず各種の木が盆栽に用ひられてゐますが、ヤツデ、アヲキ等の木に品のない物は盆栽として用ひられません。昔流行した種類は必ず何處かに美點があるのですから一時は下火になつても、又騒がれる時代が来るものです。

明治の初め頃から中期頃までは自然

のまゝの培養法で手入れの容易なもの、所謂文人ものが好まれて、永く持ち込んだのはずいぶん珍重されました。

日露戦争前後は幹の細いもの、從つて鉢も薄手で、細幹薄手鉢時代とでも云ひますか寄植とか擬では野梅などがはりました。

細幹等にも一寸見倦きて來ますと、幹の確りした立上りにも力のこもつたものが欲しがられ、眞柏、蝦夷松、等の見榮えのするものそれにつれて鉢も厚鉢となるのが大正末頃迄の傾向でした。眞柏、皐月、等の物は培養が容易で苗も挿芽等でどし／＼作られる從つて

値も安く一時は非常に流行しましたが又あまり珍重せられなくなつて來ました。然し持ち込んだ古木になりますと、非常な高値をよび値の躍きが馬鹿に大きくなつております。この様に力のある年中變化のない常緑樹ばかりになると、これにも又倦き足りなくなり四季夫々の趣を異にする落葉樹所謂雜木類が好まれる様になつて來ました。

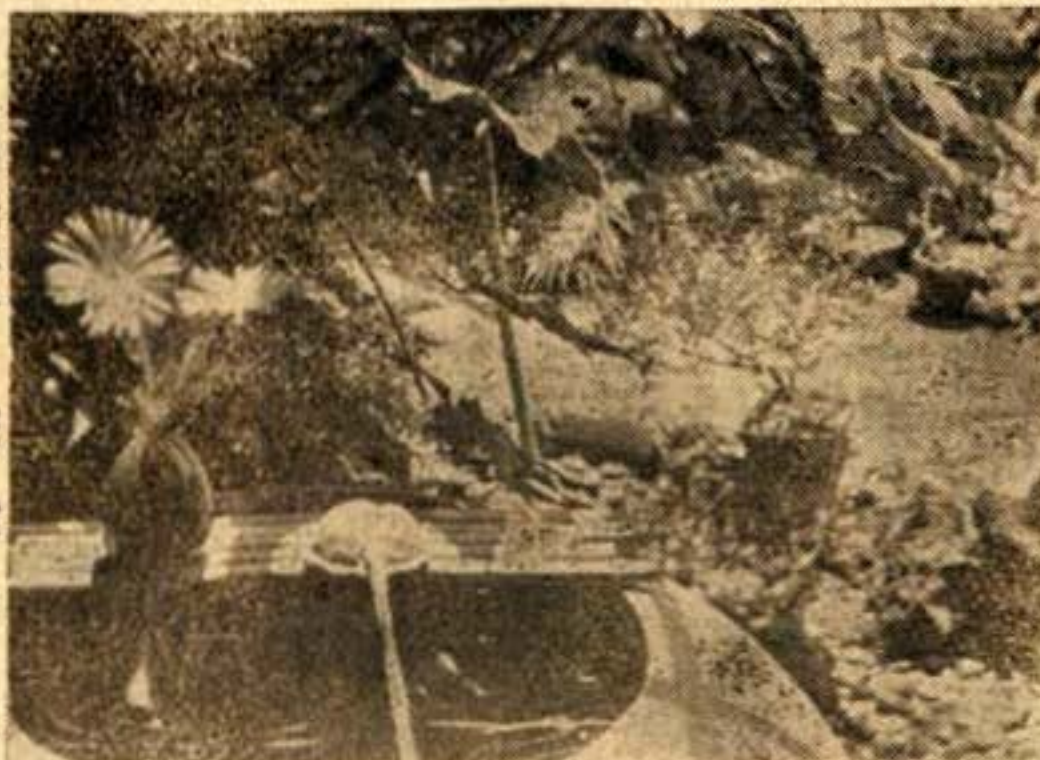
花を賞で芽出しを見、青葉によく結實にえも云はれぬサビを觀すると云つた具合に野趣に富み一年の四季折々の想ひ出を懐かしませて呉れる雜木類に選つて來ております。交通の發達培養技術の進歩によつて外國とか高山等の植物も大分以前から作られる様であり、山草の流行も見えております。好況時代には非常に西洋草花の流行を見た爲に安行、越後あたりでは一時盆栽を作らず苗木専門となつた爲に今では廿戦代のものが少く非常に値上りを來し



てゐます。

又盆栽の流行を商賣にしてゐる流行ブローカーとでも云ひますか金をかけて流行の宣傳をして儲けると云ふやり方の人も居ます。例へば蘭の「日ノ出」を流行らさうと思へばまづそれを澤山持つてゐる人Aの處へ行きそこに千鉢有るならその内の五百鉢位を時價乃至はそれより安い位で買ひ取つてしまふ。次の日は他の處で買ふ、次の日は外の手合を使つて一昨日買ったAの店へ買ひにやらす。Aの方でもは之はもつて来たなと思ふから先日一圓で賣つたものを今日は三圓なら賣らうとなる、それは一寸高いから今少し負けなさい等と云つてゐても結局は三圓で二、三百鉢買つて行つてしまふ。さうして置いてその日の夕方に又他の手合を使つて買ひにやらす。賣るAの方の店では之は益々値が上つて来たと思ふから今度は一鉢七圓位で無ければ賣

らぬ、すつたもんだしてゐても結局若干を買つて行く。他の手合にも夫々他の店でこの調子を繰り返す。翌日又黎明を待つて自動車で乗りつける位にして買ひに行く、と云つた様な事をしま



すと商賣人仲間も一般の人も之はと云ふので非常に騒ぎ出します。今まで見向きもしられなかつた様なものが馬鹿々々しい位の値で取引せられ今は一日

ノ出」でなければ夜も日も明けぬ位になります。

之等はまあ流行を流行さす極端な例ですが「歴史は繰り返す」と色々な場合に云はれます様に盆栽でも以前流行を見た種類は何時かは必ず流行するものです。自分の経験は卅年乃至四十年のものです、昔八十歳の老人から聞いた事、その老人が子供の時聞いた事などを類推して行きますと將來の流行の見當もつきます。自分が七、八年前に實生しておいた樺などは今見られる様になつております。過去を良く知つてそれを現在で割つて行けば將來の好みが判つて来るわけで、將來の流行を見るにはどうしても充分過去を知つておかねばなりません。

例へば寶山、金華山、古鑑藏等の岩ヒバ類は以前何十種とあつたものが一時見放された爲に絶滅した品種もずい分ありますが、最近又話題にのぼつて



あります。之らは關東地方の一部の人にのみ作られてゐた爲に、まあ流行の立ち遅れと云ふ處です。之らの貴重品には網を纏つて觀賞したと云ふ話もありますが寧ろそれは盜難避の場合が多かつた様です。と云ふのは之らは貴重なものですから焼いた柱とか板圍の中に入れておきますと、植え換えた當座は根が浮いてゐますから圍の外からトリモチを竿につけてさして之を盜り、モチのあとを油で拭ひ自分の物として賣つたりする者もあつたからそれを防ぐために金網を張つたのでせう。

盆栽を作つてゐますと自分で作ると云ふよりは木に使はれてゐる場合の方が多いのです。たつきの事もいやな事も時には御飯すら忘れてしまふ事まであります。いやもう全く馬鹿になり切つてしまひます。しなければせうに一日終ります、やりはじめればどれだけ

やつてもこれでいゝと云ふ事があります。せん。然しやらないで先に行つて木が弱るとか枯れるとか困まることがかかりますが手入れをしておけば、今朝興へた肥料が夕方には利いて、葉の色が青々と元氣づいて來ると云ふ具合になります。去年の夏の手入で今春はいゝ芽がつき見事な花がのつたと云ふ様にテキメンに効果が顯れるもので子供を育てる母親と全く變りません。

と云つて幾らでも肥料をさへやれば明日は尺も二尺も伸びると云ふものでもあります。苗の内は小さい鉢で薄い肥料をやり寒い時はフレームに入れて保温してやるとか、次第に大きい鉢に代へて日光にも充分當てゝ、伸びた枝をつんでやるとか云ふ様に、決して無理をしてはならぬと教へられます。世渡りでも一時無理をした爲に今まで築いた地位も名譽も崩してしまふ場合がありますが、決して無理をすべきで

ないと云ふ事を教へられます。

先日或る人が日本は服裝にしろ、その色彩にしろ、非常に區々で統一がなはい是非國民服を作つて統一しなければならぬと云つておられた。然し私はその時、日本は四季それぞれ氣候も異れば風物も違ひ四季の色とりどりで色彩も多く變化に富み、線の曲折のあるのは全く驚く位ですがこの線と色彩にびつたり調和して生活そのものを藝術化して發達して來た日本なのですから、決して無理に味の無い一つのものに統一してしまふ必要はないと思ひます。自然と程よく調和して行く爲にはやはり色々な色彩の着物が發達して行く方がいゝのだと自分は答へておきました。毎日自然に接してゐますと日本の自然に溶け込んだ生活の藝術化を強く感じます。

(筆者は東京府立園藝學校講師
日本盆栽三名人の一人)



英靈の新盆を迎へて

戦死した弟

おとうと

島 野 禎 祥

先日(さきじつ)も弟(おとうと)の墓標(はかば)をお盆(ぼん)までに建てねば—
 と言(い)はれた時(とき)、弟(おとうと)の戦死(せんし)を忘(わす)れてゐるわけ
 ではなかつたが、何(なん)か胸(むね)があつくなつた。毎(まい)
 朝床(あしたど)の間に飾(かざ)つてある寫眞(しやしん)の前(まえ)にお茶(ちや)をあげ
 ながら戦死(せんし)したのだと思(おも)ひ出す。今言(いまい)ふよう
 に戦死(せんし)したのはわかつてゐるが、そのたびに
 思(おも)ひ出す。そうして現(いま)にまだ事變(じへん)は繼續中(けつぞくちゆう)だ
 とハツキリ意識(いしき)する。非常(ひよう)に愚(おろ)かしい感情(かんじやう)だ
 けれどそれは本當(ほんとう)のことです。やつぱり何(なん)か
 戦死(せんし)した弟(おとうと)のことを思(おも)ひ出すと悲(かな)しいので
 す。それは今回(こんかい)の事變(じへん)が日本(にっぽん)の國(くに)にどんなに
 重大(じゆうだい)であり、國家(こくか)に殉(しゆん)じた弟(おとうと)の榮光(えいこう)を思(おも)

ふ。靖國神社(やasukuni-jinja)にまつられる弟(おとうと)の永世(えいせい)を思(おも)
 ます。また自分(おれ)自身(みづかみ)もがこの時(とき)、國(くに)に殉(しゆん)ずる
 榮譽(えいよう)を願(ねが)はないで居(ゐ)れません。然(しか)ししみじみ
 と生(い)きて共にまみえることの出来(で)ない弟(おとうと)を
 新(あらた)しく追憶(おひぞく)します。

×

私(わたし)達は六人(むにん)兄弟(けいてい)、男(おとこ)が三人(さんにん)、女(め)が三人(さんにん)、私(わたし)
 は長男(ちやうなん)、戦死(せんし)した弟(おとうと)は二番目(にばんめ)です。それに
 私(わたし)が中學三年(ちゅうがくさんねん)、弟(おとうと)が一年(いちねん)の時に父親(ちち)に死別(しべつ)
 しました。今日(こんにち)六人(むにん)の兄弟(けいてい)はおぼつかないな
 から互(たがひ)に一人(ひとり)でやつて行(い)けるようにやつとな
 った。そうして二番目(にばんめ)の弟(おとうと)が戦死(せんし)したわけ

です。私(わたし)がどちらかと言(い)ふと空想的(くうきやうてき)なところ
 が多(おほ)かつた故(ゆゑ)に、弟(おとうと)も随分(ずいぶん)苦勞(くろう)もした。中
 學(ちゅうがく)を卒業(そつぎやく)する時代(じだい)には私(わたし)は東京(とうきやう)の學校(がく)に出(で)て
 るたのですが、弟(おとうと)は中學校(ちゅうがく)のある町(まち)の牛乳屋(ぎゅうにゅうや)
 さんに世話(せわ)になり朝夕(あさゆふ)配達(はいたつ)しながら學校(がく)に行(い)
 つてゐた。その頃(ころ)から弟(おとうと)は非常(ひよう)に健康(けんこう)的に
 なつた、私(わたし)はその頃(ころ)は既に體(てい)をこわしてゐ
 て、健康(けんこう)的(てき)ではなかつた。それに弟(おとうと)は幼年(ようねん)
 の頃(ころ)は健康(けんこう)的に、非常(ひよう)に弱(よわ)かつた、死(し)んだ父(ちち)
 も、「俊二(しゅんじ)は無事(むじ)に成長(せいしやう)するかどうか」とよく
 話(わ)したものであつたそうだ。そんな弟(おとうと)だつ
 たが事變(じへん)で應召(おうせう)出征(しゆしやう)してから一日(いちにち)も病氣(びやうき)で
 休(やす)むようなことはなかつたようです。

去年(こぞ)の今頃(いまころ)は前線(せんせん)からさがつてまだ杭州(ちやうしやう)の
 上(うへ)の方(かた)で土民(どじん)宣撫(せんぷ)に従事(じゆんじ)してゐる頃(ころ)であつた
 と思(おも)ひます。その頃(ころ)よく故郷(こきやう)出身(しゆしん)の小學時代(せうがくじだい)
 の友達(ともだち)に逢(あ)つた通信(つうしん)をよこしてゐました、で
 も七月(しちがつ)に入(はい)つてからはたしか廬山(ろさん)の近邊(きんぺん)の山
 嶽戰(がくせん)に従(したが)つてゐたと思(おも)ひます。山(やま)また山(やま)、空
 だけが青(あお)くすんでゐると山嶽戰(がくせん)の情況(じやうきやう)をよく
 書(か)いてよこしてくれてゐました。

×

弟の三十年の生涯は考へようによつては、あつてなかつた、もし生きて歸つてくれたらばこの戦地での色々の経験、感情は後の生涯の役に立つたことでせう。だが今回の戦死は彼が生涯かゝつてもやりおほせない大きな國家への忠誠をさしげることが出来たことを考へれば、私達は弟の靈前に喜んでおがまねばならぬ。

酒のすきだつた弟、家で彼だけが酒豪であつた。よく東京の學校にまだある頃、「姉さん、にごつた酒でよいから腰が立てなくなるほど飲ましてくれ」と私の女房にせがんで日曜酒を嬉しそりにのんで、ほんとに立てなくなつて座敷をはつてゐたと言ふことだ。またその頃はよく學校の友達とも飲んで電車道に大の字になつて電車を停めたと言ふ話もきいた。

×

また私の考へ方なども一番わかつてくれてゐて、私のかわりに一家の責任を持つような

氣構へてゐてくれたこともあつた。全く、人間

間のまわり合はせと言ふことは必然であつて、

偶然で、今は、私がこうして生きてゐて、

弟が戦死する。わかるようでわからない。

私は弟の戦死を思ひ出してはそう一人つぶ

やく、「わかるようでわからない」この痴言

は弟の戦死をきづつけるだらうか。弟は

國家のために殉じたのだ。

弟の戦死の通知のあつたのは十月の廿日

であつたが、死んだ日は十三日、私はその

頃、何か非常に忙しかつたので、その日その

日をたゞ追はれるように過してゐたが、確か

にその頃、今でもはつきり覚えてゐる。戦線

からもどつた弟と一晩飲みあかし、踊り拔

いた夢を見た。私は久しく通信もない、こち

らでもしなかつた時で、それほど嬉しいこと

はなかつた。所がそれから間もなく戦死の通

知を受取つた。これもきめられた宿縁であら

うか。

×

私は弟の追憶を弟のたゞ一人の遺兒の

ためにも嬉しい思ひ出、美しい思ひ出として書きのこしてやりたいと考へてゐる。三十年の生涯ではほんとの人生は考へられぬかもしれぬ。だがその間に折りこまれた一つ一つはやはり唯一人の遺兒には得がたい父の人生でなければならぬ。

お前のお父さんと伯父さんとは一つ洋服を二人で着た。帽子はお前のお父さんの方がとても大きかつたから二人ではかぶれなかつたお前のお父さんの頭はとても大きかつたのだ。——いつの日か、一人の遺兒は吾父を思ひ、そのおもかげをしのぶのか。

私はこの一人の遺兒が成長する時この父の戦死の意義が眞實に理解出来るように何か書きのこしたい。そのためには私自身がもつこの聖戦に心をかたむけねばならぬ。今建つ一基の墓標はどんなにそまつでもよい。大陸に永遠不滅の墓標がある。弟の魂は私達を大陸から呼んでゐる。廬山山下夏の酷熱と戦ひつゝ青い空を眺めながら弟は何を考へてゐたのだらうか。(五月三十一日記)

殊勳甲の炭屋さん

川 端 祐 輔

興亞の人柱

「安立院顯威日忠居士」

これが殊勳甲故陸軍歩兵伍長稻毛安太郎君の戒名である。

安太郎君が勇躍出征したのは昭和十二年七月、日支事變が始つて間もない九月一日であつた。

九月〇日大陸に渡つた谷川部隊加曾利隊の精銳中の精銳班長稻毛上等兵が君の三轉した姿であつた。

上海戦の眞只中、幾度か生死の間に身を挺しての奮戦は當時の新報や、彼の友人の便りを通じてもたらされ、われ／＼の血を躍した

ものだつた。

而し……遂に十月十九日會宅附近の激戦はあたら二十八歳を一期に君の肉體を興亞の礎として奪ひ去つたのであつた。

戦死の報

私はその稻毛君が經營してゐる炭屋の二階に下宿してゐた。

十一月三日の朝であつた。六時頃と言へば寝坊な私には未だ夜中の様な眠りに襲はれてゐる頃である。それを知つてゐる下宿の人々は誰も早朝部屋に入つて来る者はない筈なのに、其の朝は押入を開けるけたゝましい音に目を覺された。

宿の小僧の榮どんである。「どうしたのだ!」と言ふ私の怒をふくんだ問ひに榮どんは答へ様ともしないで勝手に押入の中をかきまわしてゐる。

『どうしたんだ、い、押入れなど開けて!』『新聞がほしいんです』『新聞は下にもあるじゃないか』『下の新聞には出てゐないんです』『何が出てゐない!』

榮どんの聲は少しふるえてゐた様であつたが、彼がとんちんかんな返事は何時ものことなので私は怒りもせず、黙ろ笑つて彼のなすにまかせてゐた。

するとなほも、當然の事の様に、榮どんは黙々として押入れの中を探しまくつてゐるのであつた。

『おい、どうしたんだ』『私はわざとおどけた大きな聲で叫んだ。』

『旦那が戦死をしたんです。』

私ははつとした。

ふり向いた榮どんの顔は、炭ほこりと涙でめちや／＼に見えた。



滑稽なほど眞剣な小僧の顔からも、私はそれは本當とは突嗟にはどうしても信じられなかつた。そこで詳しい話を聞いてみると、其の朝、近くの米屋のおかみさんが「西巢鴨四丁目の炭屋さんの御息さんの最後の水を私が取りました、遺品は私が責任を以て送りますから、よろしく傳へてほしい」と言ふ出征してゐるその家の若者からの便りを持つて來たのであつたと云ふ。宿では讀賣新聞を取つてゐたし、私は朝日新聞を取つてゐた。榮どんは新聞を一ヶ月分も探したが、旦那の戦死は報導されてゐないので、私の新聞を見に來たのであつた。

私があわて、階下へ降りて行くと、普段お

ばさんと呼んでゐる稻毛君のお母さんは茶の間の火鉢にもたれて泣いてゐた。

私は、新聞にも出てゐないのだし、まして、原隊からさへ通知がないのだから、それは間違ひにきまつてゐるとお婆さんの氣分を引きたてようと努力した。私もおぼつかない私の推量が當つてゐるとは思はないのだが何かしら戦死が本當でなかつてほしいと言ふ氣分と本當であるべきでないと言ふ妙な感情の交錯が起つてゐた。(寫眞は稻毛君)

殊 勲 甲

それから二三日何の噂もなく過ぎたが、十月六日の夜、勤めを終つて歸つた私は、茶の間がいつもより明々としてゐるのと、近所の人々が神妙に控えてゐるのに、悲しい豫感を覺えた。

新聞社の人々が安太郎君の戦死の報をもたらし、平常の素行などききに來たとの事であつ

た。

その時私は小母さんや、妹のゆきさん、まつ子ちゃんを前にして一席人生無常の辯を重々しく述べたものである。今思ひ起すと當夜の人の名狀すべからざる感情の嵐と思ひ合せて自分の勇敢さに慚怍たるものがある。

幾日かの不安の間に已に決心もついたと見えて遺族の人々はもう泣いてはゐなかつた。次の日、十一月七日原隊より、「十月十九日イナケヤスタロウセンシス」の電報が達せられた。

その日米屋のお婆さんから又一通の軍事郵便が届けられた。それは二三日前に上海から來たものであつたが、安太郎君のお母さんに見せては「官報も來ない内に」と、泣かれたり、うらまれたりする事をおそれ控えてゐたものであつた。安太郎戦死状況第二便であつた。それによると彼は、例の加納部隊長戦死の激戦の前後に三回も決死隊を志願し、班長としての重任を果した事が記してあつた。最後の決死隊に参加して、敵陣の中を〇〇を

郵送して歸國したのだが不幸それが最後であつた。その最後の水を取つたのが稲毛炭屋の近くの飯塚看護兵であつたのだ。

つるおばさんはそれでも遺骨の歸國する迄は我が子の死を信じてゐない様であつた。妹の松子ちゃんなど人間の死を感じる由もない。

其後私は居を轉じたし、區民葬や其他遺族の慰安會など多忙なおばさんと會ふ機會もなかつたが、昭和十三年十月十二日第五回論功行賞、關東六人の殊勲甲の中に、稲毛伍長の功六、旭八の功績について各新聞が報道してゐた事は未だ記憶に新たな事である。

私は、私事の様に、うれしさに堪えかねてその夜なつかしいかつての宿稻毛家を訪れたのであつた。

お盆を迎へて

盆はうれしい、今年も又別れた人に會ふ日が近づいて來た。私は久しく御無沙汰してゐた稻毛つるおばさんを巢鴨に訪ねて、ありし

日の安太郎君の思ひ出を語り合つた。

昭和十一年秋に私は、炭屋では非衛生的ではないかとの友人の注告を退けて稲毛炭屋の二階に下宿したのであつた。

おばさんは大きな聲を出して笑ふ。明朗そのものゝ様な人柄であつた。炭は水分を吸収する性質で、きわめて衛生的であり、おばさんは炭ほこりについて殊更に注意を拂つて清潔を旨としてくれたので友人の心配は杞憂であつた。

それにも増して、私にしては異例的に三年の長い間居をこの店の二階に落つけたのは私と同年輩の安太郎君の人格的感化であつた事を私は今はつきりと追憶する。

其の頃私は卒業論文の作製中であつたので毎晩の夜ふかしを當然の事の様に思ひ、友人も又毎夜おそく訪門したり、論議風發、甚だしく喧騒をきわめると言ふ風であつた。それがあきると一時二時頃迄散歩に外出して、朝の早い、安太郎君の安眠を妨げたものであつた。が安太郎君は決して嫌な顔をしたためし

はなかつた。

冬の短い夜など、どんなにねむく辛い事であつたらふ。然し一度も苦い様子を示した事のない安太郎君の人格は、父なき後若くして老いたる母と幼い妹二人を抱えて、立派に店を盛り立てた努力の内に鍛え上げた賜であらう。

『親孝行な子でした、私を上方見物にやりた」と口ぐせの様に言つてゐましたのに……。夜遊び一つするでなし、たゞ商賣一途で來たあの子にせめて嫁でも取つてやりたかつたものを。でも戦死は覺悟の前と見えて、品川を發つ時は、「ゆきさん後をたのんだよ」と大きな聲で叫んでゐました。轟が知らせたのでせう。今でもその聲が耳について……。金鵒勲章の小箱や、尊き方々から賜つた武勲を語る數々の品を取り出しておばさんはなつかしげに語り續けるのであつた。

お盆が來る、いとしい息子の英霊と再會する日も近い。勞苦を額にきざむ軍國の母よ、昨日も今日も、明日も又、強く生き抜かう。



戦争の倫理

を語る座談會

戦禍の救済

尾崎「戒律問題につけても、お伺ひ致したいことがあります。新支那建設の爲に働いてゐる友人から先頃大略次のやうな意味の手紙を呉れたので、實は私もそうした問題に對する心の据え所をしつかり得たいと思ふのですが、未だにこれといふ確信が持てないのです。支那語ですが大要を申し上げますと、當地方では一日五百人位死んでゐる。貴君はそれにつき一體どういふ對策を抱かるるか。飢と疫癘。それ許りではない。親父も兄貴も一家皆兵隊に行つた。二三日位食べないのはよい方だ。食を求めて犬のやうにさ迷ひ歩き、路傍に次から次と殖れてゆく。己れ一人の生をつなぐことがむづかしい。それを目の前に見乍ら、今の私には何とも手の下しやうも無い。かういふ場合、日本國民たる貴方々はどうか考へるか。と、かう言つた調子です。それに對して、自分も實は考へが廻らないのです。現實の問題として目の前にかうした地獄相を見せられた時、如何に心の据え所を持つべきでせうか。」

中村「難しい問題です。然し大震災の場合も同じ事が云へるのではないでせうか。」

尾崎「その人も、恐らくは震災の災禍も此の何分の一にしか當るまい。而も震災には諸方からの救済があるが、此處には他からの救ひは全く見られないと申して居ります。」

中村「支那人は、兵災も天災の一つとしてゐるやうです。事の大小はあつても性質は同じで、自己の小さい力ではどうにも防ぎやうのない事だとして居ります。無辜の民には誠に一種の災難です。然しもつと大きな問題が解決出来なければ、そうした局所的苦惱は根柢治されないでせうから、要は一日も早く東亞新秩序の建設に力を致し事變の根本的解決の達成されることが先決要件です。現に支那要人中に和平運動の聲を聞くのは、彼等にも眞の更生の要望が湧いて來たのでせう。」

尾崎「然し將して迷法子としてあきらめる丈でよいでせうか。その人もこれが大きい迷法子かと言つてゐます。けれども現實にさうした苦惱に直面した時、將してそれ丈でよい

でせうか。」

中村「佛教では宿業といふことを申します。我々には覚えのないことではありませんが。」

尾崎「運命だとして死んでゆける人は悟つた人と言へませう。支那の無智な民衆はそうした諦めに慣らされてゐるやうです。」

中村「然し唯だ諦めて仕方が無いといふ丈ではいけませんまい。」

吉田「結局、七難八苦襲ひ來ることも、確く念佛の教を信じゆく所に救があるのではないでせうか。」

傳教大師は、七難消滅の爲にも念佛をつとむべしと云はれたさうです。支那に於ける日本の行動は誤解され易いでせうが、尾崎さん、

やがて貴方方のやうな青年が信仰の力で鮮血せられてゆかるれば、自ら解決されてゆきますよ。」

尾崎「支那には随分食へなければ

ば死ぬ丈だといった人が多い。念佛の道も知らずに死んでゆくのです。彼等は唯だ迷法子でよいかも知れぬが、我々はどうか心のおちつきを持つたらよいでせうか。」

鳴海「やつぱり支那に行らして新支那建設の手傳ひをされて、一日も早く明朗な東亞を作り上げることですよ。」

中村「必ずしも支那に行かなくてもお手傳ひの道はあります。しかし先程のお話は戦禍を重く視過ぎてゐませう。支那の民衆は實に我々の想像出來ない程、天災、疫癘、飢饉、洪水、兵火等五災の爲に家を焼かれ一族離散し命を失ふことは非常なものです。黄河の治水の出來た人は天下を治め得るといふ位で、一度黄河氾濫となれば、何千何萬と數知れぬ人が死に家が流され田畑がつぶれて了ふ。」

戦禍にしても從來殆んど年中行事みたいであつたことです。一日も早く日支が結合し日本が眞に溫い心で治安を恢弘し文化工作を施して眞の樂土を齎すことが却つて正しい慈悲でせう。要するにその爲の抜本的手術と言へるでせう。」

戦争の倫理性

中村「世界の平和を産み出す爲には大陣痛とも云ふべきものが要るでせう。今は世界平和、東洋平和の將來の爲の基礎を作りつつある譯です。米一粒も生命です。生命の貴さには人間も昆蟲も違ひはない筈です。米も昆蟲も決して無駄に犠牲になつてかまはぬといふ生命ではない筈です。かの蠶繭を五百千と食べてる姿も随分無駄ではないでせうか。しかし人間が蠶の無数の生命よりももつと有効に生き働き得るならばあみも以て

瞑すべきでせう。氣の毒ではあるが、より大いなるものの爲にはそれも無駄死とは言はれますまい。適の大悲劇でなく現實の生活も皆そうした生命相尅の上に立つてゐるのです。悲しいことであるだけに、かゝる犠牲の事實に氣付くとき、それに對する眞の報恩行に生きねばなりません。昔の修行者は一本歯の足駄を履いて微生物を殺すまいとした。印度では夏安居には洞窟に安居して微生物を殺すまいと心掛けた。それかと言つて何にも食はずには行かれません。一鰯の生命は幾多の生命を犠牲にしあつてゐます。油蠟を何萬と殺して菜葉を生かしそれを人が亦た食べて生きます。人一人生きる爲には如何に多くの生命を滅してゐることか。その感に感じて生きねば嘘です。」

個人でもさうであるが、國家間の戦争でも多くの人が苦難を忍ぶのは、より大なる目的を生かさん爲に忍苦する譯です。今のお話でも單に日本がよくなり、日本人が勝手な事をしたい爲であるなら、戦争も問題として考ふべきでせうが、眞の東洋平和東亞新秩序建設の大目的を思へば、如何なる犠牲を忍んでも一日も早く聖戰の目的を達成する事が必要です。それを唯だ支那民衆の幾人かが犠牲になる事許り見るのでは局所觀に過ぎません。日本の爲に支那を犠牲にしてゐるのでなく新支那建設の爲にどの位大犠牲を拂つてゐるか。米も油も菜も犬も人間も生命の貴さは一つですが、大なる生命をよりよく生かしてゆく道を考へるときその百年の平和と云ふ本當のいのちに重きを置くべきです。そ

こに大宇宙の攝理があると思ひます。」

鳴海「要するに南無阿彌陀佛でよい。自分が生きることが凡ての生きることだと思ふ。」

尾崎「私も自分考で返事はしたのですが、縁無き衆生は度し難しと捨てて了へない氣でした。」

中村「聖戰の眞意もそれから出てるのでせう。」

大生命のために

然し、今の問題は古來重要な問題とされてゐることです。だが、それも「生命」を一個の存在として考へて居るところに、根本的な誤謬がある譯です。つまり個在觀念の上に立脚して居るからです。一個在でなく綜合態としての考へも入れねばいけないでせう。例へば此處に一本の樹があるとして、數知れぬ細胞の綜合態です。然か

も其一つ一つの細胞は夫々一個の生命體です。そして數多くの緑の葉も矢張り數多くの細胞を集めた獨立體です。更に一本の小枝はまた其上の獨立體です。かくの如く個々の生命を持つ細胞の集りが一枚の葉となり、葉としての立派な綜合生命體が一本の小枝となり、數本の小枝の集りが一本の中枝となり大枝となり、中心の幹に寄托して一本の完全な樹となつて居りますが、若し其葉や小枝やが病氣になつた場合、おしむことなく夫を切り去らねばならぬでせうし、枝葉の悪い枝があれば何んなに大きな枝でも切り捨てねばならぬ。場合もあります。かうした場合、多數の生命たる細胞の死滅を悲しむ心もありませうが、他面に一本の樹としての大生命の整備に、それ以上の價值を認めて、それ

を斷行しなければなりません。今の戦争の場合もやはりさうです。と云つて單なる全體主義がいいと云ふものではありません。個々の細胞を愛することは、致々切々として撲まずうまず大地の下では澤山の養分を吸ひ上げて其細胞の生命維持につとめて居ります。然し乍ら非常の場合には泣い馬鹿を斬ると云ふことも許されるでせう。倫理性も小乘的なものと大乘的なものの相違があります。即ちより高い價值生命を進展させる爲に小價值小生命を犠牲にするのも大乘的倫理から見ても許されます。

東京淨き友の會第十六回座談會の續き、紙面の都合上加筆補充せり。

藪の中やぶなかの佛ほとけ様さま

醫學博士 和田正系

世の中には中々おもしろい事が有るものである。

もう一昨年の春になつたが、ある靜かな朝のことであつた。私たち夫婦は朝のお茶を飲みながら話をしてゐた。妻はふと

「ありがたいことに、この頃うちの子供達は夢も見ないで良く眠りますわ」

と云つたのである。すると先刻から眼を覺して床の上に坐つてゐた、今年八つの女の子は

「麗子ちゃん、ゆふべ夢を見た……」

と云ひながら茶の間に出て來たのである。

眠ねそんな眼めをこすりながら――。

私達わたしは面白おもしろがつて、

「どんな夢を見たの」

ときくと、

「お地藏様お地蔵さまを起した夢を見たの――」

と云ふ。そこで、いよいよ興きようを催もよほして段々だんだん訊ねると、裏の小山の竹藪たけくさで、お地藏様お地蔵さまを起して上げた夢を見たといふのである。

「それは面白おもしろいなあ、本當ほんとうだつたら面白おもしろい――」

と私はつぶやきながら、とに角行つて見やうと寢衣姿ねえさぎの麗子れいこを伴つて出かけた。

私の家は町はずれの淋しい松林の近くにあつて、お隣りは神社である。その間には小高い丘が横つて、可なり大きい樹木が繁

り、一めんに篠竹が藪を爲して居る。そんな所は今まで用が無かつたから行つて見たことも無い。子供の後について、竹藪を分けて行くと、ふと、落葉の中に僅かばかりあらはれた石の端が見つかった。まはりの落葉をかき分け漸く起して見ると可なり大きい、重い石である。何か彫つてあるが土が一めんに附いてゐるので良く分らない。そこで家からばけつに水を汲んで來て、たわしで洗つて見ると、それは確かにお地藏様なのである。顔は風化してよく分らないが、とも角圓い頭で、兩手を胸の前に揃へて、寶珠を捧げてゐる、まぎれも無い地藏尊である。それは蓮瓣形の石を浮彫にした



もので、佛體の兩側には文字が刻んである。よくよく土を洗ひ落して見ると、左側のは明和 年といふ年號で、右側のは戒名のらしいのである。墓石である。無縁佛のお墓らしいのである。薄暗い隠氣な竹藪の中で、無縁佛のお墓を掘るなどといふのは、あまり氣持の好いものではない。

ところがその附近を見ると、まだ二、三、石が出てゐるのである。ついと思つて掘つて見ると、何れも佛像を刻んだ墓石である。今度は少し廣く、あたりに棒をさして搜索すると、すつかり埋つてゐたお墓が、出て來た出て來た、都合六體が掘り出された。ばけつに何杯も水を運んで、一家總出で、お墓を洗ひ、藪の中に、とも角も並べて見た。

蓮華を持つた聖觀音が一體、坐つて頬杖ついたやうな如意輪觀音が三體、坐つた地藏様が一體、立つたのが一體。墓の大きさと戒名から見て大人が三人、子供が三人。大人の中二人が男で一人が女。子供は二人

が女で一人は男である。一番古いのが元祿九年、一番新しいのが安永十年と讀まれた。この元祿九年のものが聖觀音で、一番古いにも拘はらず少しも傷んで居らない。とに角、無縁佛に違ひない。この藪に墓場があつたとは思へないが、それも確かな事は分らぬ。或は何時の時代にか、何かの都合でこの藪に墓石を捨てたのかも知れない。無縁と思ふと何となく憐れを感じる。

知らねばそれ迄であるが、知つて見れば、この藪藪の中に捨て、置くに忍びない。そう思つて近所の人も頼んで六體を藪の中から持ち出した。丁度その丘の裾に、一本の大きな藪肉桂の樹が繁つて居る。その大枝の下が雨もよけるし、日陰にもなるので、少し許り笹を刈り取つて地ならしをやり、鎌の手に、六體を安置した。大工を頼んで有り合せの材料で、低い目かくしの塼を造つて貰つた。青竹を切つて花立も出來た。

「誰も見えてやり手の無い佛様だ。うちでお線香でも上げてあげやう……」

そう云つて、時々、思ひついたやうに、家の者たちは、かはるくお花をさしたりお線香をあげたりした。お盆やお彼岸や、うちの佛様の命日には坊さんが來て下さるので、その時、一寸行つて拜んで置くこともあつた。

その藪の下を一本の細道が通つてゐる。そこは畠へ行く農夫より他に通る人も無い。その百姓の人達が肥し桶をおいて、畠から折つて來た菜の花をわざわざ挿してゆくこともある。又はな垂れ小僧達が、名も知らぬ雜草の花を活けてゆくこともある。また、誰が上げたのか知らぬ線香が、ほそぼそと煙りを立てゝゐるのを見つけて驚いたこともある。牡丹餅やお菓子誰が上げたとも無く供へてあつて、又それがいつとも無く、なくなつてゆくのである。野良犬が御馳走になることもあるし、又通りがりのいたづら小僧が一寸頬張つて行くこともある。名も知らぬ小鳥が、お供へ物のお米や御飯を食べに來て、人が行つても

少しも逃げないやうなこともあつた。
「また昨日の小鳥が来てゐますよ」
と妻や子供が、さも親しい者の訪れのやうに喜んで語る朝もあつた。
こんな風にして一年たち、二年たち、今年この春となつた。

ある朝、しばらく忘れてゐた、このお墓はらみに行つて見た。すると驚いたことには新しいお賽銭箱さいせんばこが置いてあるのである。

お賽銭箱といつてもそれは木の切端で素人が造つた、ほんのお粗末な小さい木の箱であるか、のぞいて見ると既に一鐵銅貨てつどうかが五六枚は入つて居る。

「ほほう。これは大變なことになるつた」

と私は驚きの餘り、直ぐに引返して家の者達ものたちにその話をした。妻や子供達も珍しがつて、ぞろ／＼見に行つたものである。

すると、それから二三日後の朝である。

今度は妻が、

「大變です。大願成就だいがんじょうじゆといふ赤旗あかきがあがつてゐます……」

と報告した。そこで又家内中うちうちで見に行くと、樹の枝に一枚の赤い旗が、鮮やかに吊してあるのである。確かに「大願成就」と



黒々と中央に書かれ、横には隣り町の名と人の姓名せいめいとが記されて居る。

その内に「大願成就」の旗は忽ち三枚になり四枚になつた。「大漁」といふ旗もあ

る。どんな大願が成就したか、その人に會つて聞いて見たいと思つて居ると、或朝そこで話し合つてゐる人に會ふことが出来た。一人の話は出征してゐる息子が名譽の負傷をして、入院した迄は分つてゐるが、

その後何の便りも來ない。心配してこの佛様に七日の願をかけると五日目に便りが來て、その息子は傷も治つて再び戦線へ元氣で還るから安心して呉れとあつたといふ。一人のお婆さんの話では、これも息子であるが、今度、船長の試験を受けることになつたについて、今迄度々失敗して居るので願をかけた所、三日目の夕方、及第及びを知らせる電報が來たといふ。お参りの人達は段々とふえて行くやうである。

私達はさういふ人々の眞面目な話を段々聴いて感心して了つた。今迄この佛様には何もして上げなかつたが、今度は一つ御供養の石塔でも立てやう等と話してゐる所へ、丁度家の修繕を頼んでゐる大工さんが



来て、私の知つてゐる石屋を呼んで聴いて見ませうといふ。電話をかけて呉れると丁度在宅してゐたので、直ぐ来て呉れた。こんな風にして、忽ちお地藏様を一體彫つて貰ふことに決定して了つた。観音様にしやうか、阿彌陀様にしやうか等と相談したが、矢張り彌子の夢はお地藏様だから、お地藏様が一番良いのだといふことになつた。

お参りの人達は朝暗い内からやつて来る。まだ薄暗い例の樹の下で、お經をあげる聲を聞くことも度々である。誰とも無くきれいに掃除する人があつて、誰とも無くお線香が焚かれ、お花があけてあるのである。線香の煙は朝から晩まで絶えない。數へても見ないが恐らく参詣人は一日に百人以上有るだらうと思はれた。藪の下の小道は狭いといふので、鋏をもつて来て雑草を刈取り、ずつと擡げて呉れた人がある。また、お詣りには狭いといふので、藪を刈つて地域を擴張して呉れた人もある。

その中、一流の新聞社の記者が噂を聞いてやつて来た。地方新聞からも聴きに來た。それ等の記事が發表されると、今度は更に毎日参詣人が殺到した。一時間も汽車に乗つて來た人もあるし、十人二十人と連れ立つて態々來た人もある。線香の煙は濃々と藪から立ち昇つて、遠くの方からも見えるのである。

つゝましく般若心經をあげて行く人もあれば、團扇太鼓で勇ましくお題目を唱へて行く人もある。お念佛を申す人もあれば、眞言を稱へる人もある。

石屋に頼んだお地藏様が出來上つた。このお地藏様が實は又豫想外に、良く出來た。無心の童子の如く、蛾眉豐頬、今にも笑ひ出すかと思はれる。誰でもこのお地藏様の顔を見たら、嬉しくなるに違ひない。

開眼式はほんの型ばかりであつたが、續いて仰會から態々島野禪祥師が來られて、導師を勤めて下すつた。親しい近くの坊さん方も來て下すつた。その日は生憎雨だつたが

近隣の善男善女が押し寄せて、動きの取れぬ程だつた。

どうも面白いことが有れば有るものである。この土地の人は信仰心が薄い等といふ話をいつか聞いたことがあつたが、ある親しい人が私に語つた。

「どうして、どうして——。みんな拜みたくつて仕方が無い心はもつてゐるんだ。

たゞ拜むものが無いんだ——。」

私はこの暗示に富んだ言葉を、幾度もくりかへして見た。

東京附近例會案内

良忠寺支部例會

七月六日午後六時より

會場 横濱市鶴見區矢向町

良忠寺に於て

(南部線尻手下車)

講師 佐藤賢順師

本部婦人部例會

七月一日(土)午後一時より

會場 芝公園明照會館樓上

(増上寺下車、プール隣)

講師 佐藤賢順師

信仰相談 中村辨康

菩薩は實在か非實在か

問

經典の序分の中に聽衆として御弟子がたや菩薩がたなどが擧げられて居りますが、お弟子の羅漢様は現實の人だから問題はありませんが、菩薩は多く現實的な人でないやうに思はれます。之は外の世界から佛の說法を聽聞に來られたものなのでせうか。それとも理想的な人として經典を飾る爲のものとせうか。現實的な人達と非現實的な人達と併べられてあるところに、一寸理解の出來ないものがあります。如何に考へたらよいでせうか。(淨き友の會に於ける某氏の質問)

答

むつかしい問題です。現代人に於て初めて氣の付く問題でせう。昔は菩薩實在に就いて誰も疑ひを持つて居るものがありました。然るに佛教史の研究に依て、原始佛教時代には佛陀である釋尊の跡を繼ぐ補處の菩薩として唯一の菩薩即ち

彌勒菩薩だけが認められて居たもので、將來佛たるべき因位時代の人が菩薩であるとの考へから、澤山な菩薩の存在を承認せず、彌勒菩薩以外は皆な「阿羅漢」であるとのみ考へられて居た譯です。然しそれは形式尊重主義特權尊重主義の上からさう思はざるを得なかつたのですが、それでは理想主義の人達には納得の出來ない事で、佛作佛行を學び四弘誓願を貫徹せんとする時、理想境である「佛果」を望む人達を現實的な菩提薩埵としては認すべきであり、且つそれは獨り出家に限らず在家の人々にも適用さるべき筈であるとの見解から、在俗姿の菩薩も多數あるべしと考ふるに至つたのは寧ろ當然な歸結であらうと思ひます。其處で大乘經典の特長として菩薩の名が列ねられたことも合點が行く譯です。大乘教に於ては佛は釋迦一佛だけでなく賢劫の七佛を初め三世に亘り十方に亘つて三

信仰上の御相談に應じます。御質問はハガキに住所氏名御名記の上、信仰御相談係宛御送附のこと、誌上匿名は可。

千佛乃至無數の諸佛ましますと考へるので、隨つてまた將來の佛たるべき人として無數の菩薩が考へられて來る譯であつて、決して荒唐無稽な空想の所産ではないと思ひます。例へば自分の持つて居る時計ばかりが時計でなく、現に具體的な時計があり時計の組織内容や理論が明了に究明されてある以上、他にも色々な時計が有り得ると確認され、決してそれは空想でなく事實だと信じ得るのと同じ道理ではないでせうか。そして時計には懐中時計、腕時計、目醒し時計、ボンボン時計、置時計等々が考へられるやうに、菩薩もまた夫々獨りな特長を持つ人々が有り得る筈です。智慧を特長とする文殊菩薩、慈悲を主とする彌勒菩薩、不撓不屈を特長とする阿逸多菩薩、願行を中心とする普賢菩薩、他を尊敬することを特長とする常不輕菩薩と云つたやうに、夫々の性格とか思考とかに依て特別な長所を發揮する菩薩あり

と思ふことも決して無理な事ではありません。また御承知のやうに大乘經に於ては聲聞よりも菩薩が中心であつて、其聲聞をして單なる自分丈の解脱を目的とする阿羅漢果に止めしめず、利他的な大乘精神に導入せしめんとするものですから、寧ろ菩薩への説法を主眼とせられた筈であります。然し乍ら其説法が羅漢たる出家の弟子達に依て傳持された關係から、そしてそれが現實的な證明者ともなり得る關係から、お弟子達の名が列記されたことも當然でございます。

だから大乘經典に於ては聲聞衆よりも菩薩衆の方が重い譯です。ただ、聲聞衆は教團内に於て出家人として常在的な所屬のものでありますけれども、菩薩は出家もあるにはあるが、多くは在俗の人達で教團所屬の上では自由な立場にある關係上一面煩惱生活をなしつつ戒律的には不明了であつたから、勢ひ精神的な見方をして其特長だけを抽出したであらうことも思はれます。かやうに生活形式の上には眺めず、其人達の精神的な内容に重きを置いて尊敬して居たことを想像しますと、實在的よりも寧ろ抽象的な理想人として見られ

て來たのではないでせうか。

假りに一步を譲つて單なる抽象的な理想人格であつて實在者でなかつたとしても、それは決して想像所産のものではなく假空な人格ではないと思ひます。若し菩薩が單なる想像であつて無價値であるとするならば、例へば空を飛ぶ飛行機と云ふものなども少くとも何十年前前には實在的でないから無價値であり信するに足りないといふ推論しなければなりません。が、事實現に實在し得たのです。かくの如くザインばかりが實在ではなくゾルレンもまた實在であると考へても間違ひではないと云へませう。

然しかうした理窟は往々にして獨斷にもな

り誤謬もあらうと存じますし、宗教は科學や學問ではありませんから、理窟を超越して信ぜられるところに本當の力と効果とが有るものであつて、事實また佛が信ぜられたら菩薩の實在も信ぜられる譯です。即ち佛を目指す者は如何なる人でも菩薩であるからです。三日月から十五夜の月まで月たるに相違ないのと同じです。それがよりよい形に於て個有名詞を持つ大菩薩として其實在が信ぜられ且つ尊敬されてもよいではないでせうか。それが他の世界の人であらうとも、または此世の人であらうとも問題にするまでのことはないと思ひます。

往生人の瑞相は有り得るか

問

阿彌陀如來來迎圖など拜見いたしますと紫雲靈變として棚引く姿が

畫かれてありますが事實有り得る事でせうか。實は三年程前ですが、私の母が七十四歳で聊かの苦みもなく眠るが如くに永眠いたしました。早朝の事でしたが、最後の別れをし

やうとして私の妻が、掛けてあつた白布を捲り上げましたところ、ホンの一瞬間の事ですけれども、私の耳に何とも申しやうもない微妙の樂の音が響いて参りましたのです。私はツイうつとりとして其樂の音に聞き惚れて居ましたが、不圖氣が付いて「ハテ今の音は」

と思はず大きな聲を出しました。他の人達は「何が、何が」といぶかるので「あなた方には聞えませんでしたか」と其樂の音の事を話しますと、ラヂオの音だらうなどと申して誰の耳にも聞こえなかつた様子です。妻は私の聲に振り返ります時、手にして居た白布を離しましたので、其時スーツと煙が上空の方へ消えて行くやうに、其樂の音も消えてしまひました。それ切り音はしませんでした、實に何とも云へない不思議な音で、しかも誰一人それが聞けなかつた事は如何にも残念でございます。然し私としては命日の度毎にそれが想ひ出され、何時も妻と語り合つて當時を追想して居ります。何うも不思議でなりません。如來様の御來迎の時紫雲の棚引くとか異香が薫るとか音楽が聞えるとか色々な奇瑞があると思はしますがさうした事もあるものでせうか、お教へを賜りたう存じます。(大阪愛讀者)

答

お話しやうな事は古來から間々あることで、單に一人ばかりでなく、多數の人が見聞した事實さへある様です。現に昨日も瑞雲の棚引くのを西の人

東の人南の人北の人も見たと云ふ或る正念往生をなされた方の近親の人からのお話しを承りました。それは或は偶然な現象だとして簡単に片付ける人もあるでせうし、貴君のやうな場合の事を心理學的に批判して「幻聴」として葬り去る人もあるでせう。無論「幻視幻聴」に悩まされて身體が衰弱し命も危ふくなると云ふ病的なものもありますし、狐着きだとか、大神使だとか色々な「幻視幻聴幻覺」に依る俗信仰などで社會に害毒を流した事例も澤山あり、催眠術や暗示法に依て治療せしむる事も出来る譯ですから、さうした心理學的な見方が間違ひであるとは申しませんが、かゝる事の中にも、健康状態との區別があるべきでそれを同じやうに「常態ならざるが故に」と云ふ理由の下に葬り去つてしまふことは全くよくない事です。其人の爲にならぬ事であり或は社會的に惡影響を與へるものであるならば、無論病的でいけない事ですけれども、それに依て其人の信仰が正しい姿に於て生長し、或は社會への影響が道德的にも宗教的にもいい結果を與へるものであるならば、それは健康的なもので

すから其儘に奇瑞とし靈瑞として尊敬し尊重して行く可きものだと思います。

常態でないからと云つてそれを蔑視したり惡く考へたりする理由は毫もありません。それなら天才だとか名人だとか云ふものは皆な常態でないのですから尊重されなくてもよい筈です。相撲取など變態的肉體の所有者で問題にさるべきでないのに高い木戸料を拂ひ泊り掛けで見に行つて熱中するなんて全く御話にならないと云はなければならぬことになります。其他専門的に優れて居る學者とか技術者とかも皆な常態ならざる變態者であります。其等變態者が皆な社會的にも國家的にも或は國際的にも尊敬せられつゝあるのは社會的に貢獻ありとし利益ありと考へるからでせう。

特に信仰は「超出常倫」の道であつて常態ならざるものを要求して居るのです。それが社會國家世道人心に惡影響を與へるものならば迷信的な類似宗教でありますけれども、社會國家を健全にし世道人心への好き刺激となるものならば高等なる健全宗教として社會も國家も之に保護を加へ其生長發達を希念すべ

きです。

今御尋ねになりました靈瑞の問題にしたつて同じことだと存じます。無論信仰的に有り得る事でございます。此場合病的ではないのですから、貴君は聴き得た當事者として大いに喜んでよいのであり、且つ其事に依て貴君の信仰が潤ひをつけられ、温か味をつけられそしていよいよますます培養されて行くならば、更に更に一層の光輝を放つ譯であつて大に尊重してよい事だと存じます。

淨き友の信仰座談會御案内

七月二日(第一日曜日)午後七時半より
會場 東京本郷東片町七八(白山上)
橋本方

(電話) 小石川(86) 四九七六番
(美容大學院)

講題 阿彌陀經講話
講師 中村辨康師

七月二日を以て上半期の座談會を終りました。八月兩月は休會することになりました。
九月よりは規則を作つて毎月二回宛開會し理事組織の下に會費として毎月余貳十錢宛頂くことになりました。から何分よろしく御願ひ致します。

淨き友の會理事

三身即一の如來様とは

(問)

よく三身即一と云ふ事を申します。が、如來様のおからだに三通りあつてそれがそのまゝ一つだとは何うも考へられない事です。どうぞ常識的に御教へ下さい。(東京・小石川・K N 生)

(答)

三身と云ふのは法身と報身と應身。の事で(報身にも自受用身、他受用身とがあり、應身にも勝劣の區別や化身などあり、また法身にも法性法身、方便法身などありますが、それまで申しますと話が面倒になりますから、普通の三身に就てのみ申し上げます)法身とは法の身即ち抽象的な理體を指して云ひ、報身とは報ひられた身即ち人格的なおからだを云ひ、應身とは私達人間に應同した肉體をおもちになつて居られることを申します。

簡単に引つくるめて申しますと、報身が信仰上の主體で、其理論的方面を法身とし、具體的方面を應身としますから、此三身は畢竟一であつて元來具體的なおからだは三つある

譯ではありません。例へば茲に時計があるとしますと、其時計の原理は時計の法身であり、ますし、その出来上がった時計そのものの價值が時計の報身でありますし、その時計の姿形が時計の應身なのであります。だから時計の格好だけが時計の全體でもなく、時計の理論が時計でもなく、時計の價值の高い低いに依て、時計の理論も具體的な形も止揚される譯です。だから三身即一なのです。

ところが釋尊を應身とし阿彌陀佛を報身とし大日如來を法身と限定しまふので、此三佛が「即一」とは考へられないと云ふことになつて「三身即一」が納得されないのですけれども、既に個有名を持つて居られるのですから大日には大日の三身即一があり釋尊には釋尊の三身即一があると見る方が本當です。無論諸佛平等の上から云へば、大日も彌陀も釋迦も一體たるに相違ありませんが、それは法身觀的に見た見方で、報身觀的や應身觀的には「即一」だとは云へないと思ひます。



童話

蛇

の足

あづま

一郎

蛇には足といふものはありません。蛇はおなかの所に生えてゐる鱗を、立てたり倒したりして地を匍ひます。じつに上手に早く走ります。足がないのによくあゝ早く走れると驚かれるばかりです。

その蛇にも、しかし、むかしほんの短い間のことですが、足のあつたことがあるといふお話です。

いつ頃のことであるかは判りません。場所もどこの何といふ所であるか、兎に角或る國に、大層奥深い山がありました。行けども行けども渾しない鬱蒼たる密林、その中には荒々しいけだものや鳥ばかり棲み、元より人な

ど住める所ではありません。所がたつた一人その中に庵をつくり、木の實などをたべて住んでゐる人がありました、それはある大層徳の高い坊さんでした。

坊さんは、さういふ奥深い所に、たつた一人きりでゐて、行をつんでゐられたのです、ひたすら御自分の徳を磨くことに一心不亂でした。

坊さんは大層慈悲の心の深い方でしたから、森のけだものや鳥達も、決して危害を加へる様なことはなく、それ所が却つてまるで坊さんの召使か何かのやうに、それらのけだものや鳥たちは、坊さんの爲に、或は木の實

を探してもつてくるとか、水をもつてくるとかするのでした。坊さんの方は、けだものが怪我をすれば、親切に手当をしてやるとか、鳥たちに道を説いてやるとかしました。今まではひどく仲がわるくて喧嘩ばかりしてゐた連中が、坊さんの感化ですつかり仲善しになり、山はおかげで大層しづかになつて、坊さんの行をする妨げになる物音も段々になくなりました。けだもの達が話し合ひました。「静かにして上げよう、坊さんの修行のお邪魔をしちやならない」で、大層平和でした。

ところがこゝにたつた一つ、それでも決して悪い氣があつてゐなく、兎角坊さんのお邪魔をするものがありました。それは蛇でした。山に澤山棲んでゐた蛇達は、歩くとざわ／＼と、れいのおなかの鱗の音を立てます。全くこれは蛇に足がなく、鱗で匍ふ以上、どうにも仕方のないことであつたでせう。流石の坊さんも、この氣味のわるい音には大弱り、兎角心をみだされ勝ちでした。



坊さんは、それでなくても足のない蛇をさぞかし不自由なことであらうと、或る時蛇に足を生やしてやらうと、お思ひ立ちになりました。それで蛇の大將を呼んで云はれるのには、

「どうだね、お前達は足がなくては歩くのに大層不便なことであらう、ほかの虎や獅子のやうに、足を生やして上げようと思ふがどうかね。」

すると蛇の大將は大層悦んで、

「それはどうも願つたりかなつたりのことではありますが、尙仲間ともよく相談しまして、折角の御親切を御うけ致すかどうかを決めませう」

「うむ、それがいいだらう。」

と坊さんが云はれ、蛇の大將は仲間のところへかへつてきました。

さうして蛇同志の大会議が開かれたといふわけです。

いよく會議があるといふ日には、世界の各地から何百萬、何千萬といふ蛇が會場を集つてきました。日本からも代表が行きました。獨逸からもきました。伊太利からもきました。みんなてんでに樹に巻きついたり、地面の上でとぐろを巻いたりして、會の始まるのを今や遅しと待ち構へてゐます。

定刻、蛇の大將は演壇に匍ひ上ると、その演壇の上に立つてゐる一本

の高い柱に巻きつき、鐵首をもち上げて云ひました。

「さて、皆の者、坊さんが親切にも我々一同足がなくてはさぞ不便であらう、足を生やしてやらうと云つてゐられるが、我々はそれをお受けして生やして貰ふかどうか、それを皆によく相談して貰ひたいのだ。」

あまり思ひがけない話に、忽ち會場は喧々囂々の議論の聲に充たされました。

何しろ可成り賛成者も多かつたが、反對するものも少くはありません。反對するもの主な反對の理由としては、たとへば、

「足がなく、鱗で匍へばこそ我々は立派な一人前の蛇だが、之が足が生えたら我々は、蜥蜴と變りがなくなつてしまふぢやないか、蜥蜴と同列になるなんて、蛇たるものの汚辱にもさわることだ。」

といふものがあります。之は蜥蜴は蛇とよく似てゐる乍ら一體に小柄なので、丁度からだの大きな人間が小さな人間を輕蔑するやうなもので、その小さい蜥蜴と同じやうになるの



を厭だといつたのです。又同じ理由で、鱷と
同じやうになるのが厭だといふものがある。
蛇はよく鱷にやられるので、その恨みからそ
んなことを云つたのです。しかし一番反駁な
のは何といつても錦蛇のやうな大きな蛇で、
その反駁の理由は、

「我々のやうにからだの長さが二丈(六米)
も三丈(九米)もあるものは足をつけると

いつでも四本や六本つけてもらつたつて却つ
て不自由で、自分で自分のからだをもち扱ひ
かねるだらう。さればといつて百本もの足で
は、歩くのにどの足からふみ出していゝの
か、矢鱈に歩いたのでは自分で自分の足に踏
いてしまふだらうし……」

といふので、考へると、之も相當もつとも
なことのやうです。全く百本も足のある蛇を
想像して御覽なさい、眞直ぐになつ
ては梯子をもつて歩く様で、つゝば
つて不自由だが、さればといつてく
ねく歩くのには、いつも、自分の足
に踏いてゐなければなりませんまい。

しかし、てんでに議論してゐたので
はいつ迄も果しがありません、到頭蛇
の大將は咳一咳、一同に静肅を命じて
から、

「よろしい、これではかうしようぢや
ないか、足を生やしてもらひ度いもの
はしてもらふ、生やしてもらひ度くな
いものは止すと。」



軍病院より

東慈道 (本社編輯部)

第一戦の病院にゐる時は貴重な體驗をし
ました。時々廣東奪回の意氣に燃えた正規
軍が夜襲して來ましたが、その時敵の小銃
弾がビュン／＼屋根に命中したことがあり
まして、戦地らしい病院の感を深くしまし
た。また豪雨を侵して残敵の大掃蕩戦があ
りました。激戦が続いたらしく戦傷者が
入院して來ました。その中の二三名は入院
後間もなく絶命しましたが、その斷末魔の
叫聲をぢかに聞いた時は思はず胸がつまつ
て涙が頬を傳ひました。彈丸雨飛の中に命
をすてゝ働いてゐるこれ等の戦友のことを
思ふと、不覺にも病に倒れておめ／＼病床
に呻吟してゐる自分が情なく思はれて、泣
けて／＼しかたのない事もありました。感
傷と云へば感傷でせうが、戦地にゐると、
元氣に戦ひたいと云ふ氣持が油然と湧いて
來ます。病床では泣くのも感傷的と一概に

すると一同この案に賛成して、やつと會議は終了しました。

蛇の大將が、足を生やしてもらひ度い連中の一隊を引き連れて、坊さんの前に現はれ、それではお願いしますといひました。それで、坊さんは早速その通りしてやりました。何しろえらい賢い坊さんですから、何でも出来ないといふことはなく、忽ちおかげで世界中の蛇の半分は、今までのやうに鱗でなく、足で歩くやうになつてしまひました。

所でもの事といふものは、さう急に様子をかへてはいけないものだ、思はぬ所に害の及ぶものだといふ事を、やがて坊さんは知つたといふのです。

足を生やしてもらつた蛇が、わるいことをして仕方がないので、今迄とちがつて早く歩いたり逃げ出したり出来るのをいゝことに、人里に現はれて穀物や人に害をしたり、鳥をさらつたりして仕方がありません。坊さんは始めはお説教で、さういふことを止めさ

せる様に骨折つてみました。が、駄目です、蛇は鳥のやうに利口でなく、道を説いても耳はまるで風穴の機で、右から左へすぐぬけてしまひます。言ふことをきゝ分けないので

坊さんは口を酔くして説くが、どうしても効めがありません。そればかりか、蛇は不器用もので、流石の坊さんには悪いことはしない迄も、歩く時折角の足を不器用に動かすので、却つて騒々しく、坊さんの修行の妨げになります。

之はいかん、と頭坊さんは考へました。ヤツバリ蛇には足のない方がいゝ、造化の神様の造つたまゝの方がいゝ様だ。

で、或る日頭坊さんは佛様の加護で蛇の足を又もぎとつてしまひました。それ以來蛇には足がないといふお話です。(終)

庭の隅金魚の墓に花を植ゑ

否定しきることとも出来ません。郷愁、戦ひのあこがれ、こんな矛盾した氣持が混然とまじつて、僕は病床生活をさいなみました。が、この體驗を少しづつ、原稿に書いて見やうかと思つてゐます。とにかく戦地では獨特の精神が働きますが、特に病氣になればその働きは顯著になるやうです。

本日は西本願寺の慰問使が病院へ来て患者一同へ見舞の挨拶をしました。恐らく南支へ慰問使を送つたのはこれが始めてやしやう。従軍僧はかなり來てゐますが(それは東西本願寺のやうです)淨土宗は南支へまで手が届かないでしやう。近く在京の方々の支那視察團が出發するそうですが南支へは來られないんですね。

こゝの病院は東京の衛生隊ですが、今迄九州の言葉ばかり聞いてゐた僕にとつては懐しい齒ぎれのいゝ東京辯が氣持よく耳に響きます。

最後に皆様の御健闘によつて愈々「淨土」が充實し鑽仰會が發展して行くのを遠く南支からお喜び申上ります。

雙仰運動
二
一
二

會則

第一章 名稱及事務所

第一條 本會ハ法然上人鎮仰會ト稱ス
第二條 本會ハ事務所ヲ東京市芝區芝公

地ニ支部ヲ設ク

第二章 目的及事業

第三條 本會ハ法然上人ノ遺徳ヲ瞻仰シ

第四條 信仰修養ニ資スルヲ以テ目的トス
本會ハ前條ノ目的達成ノ爲左ノ

事業ヲ行フ

一、法然上人鑲仰ノ文書及信仰修
 贊ニ關スル文書ノ刊行願布
 二、法然上人鑲仰ノ月刊雜誌ノ刊

三、法然上人鑽仰ノ講演會、講話

第三章 總裁及副總裁

第五條 本會二總裁副總裁相談役若干人

總裁ニ淨土宗管長、副總裁ニ四個
大木山法主ヲ推戴ス

第四章 役員及相談役

第六條 本會ニハ左ノ役員ヲ置ク

主理相會
談
事役長
一若若干人
若若干人
若若干人

理事(內一人ヲ事務理
トス)常務理

一、評議員若干人、
會長、淨土宗執綱之ニ當リ相談役
理事長、常務理事、理事、主事、

第七條 評議員ハ會長ノ職務ヲ指シタル如シ

會長ハ會務ヲ總括ス
理事長ハ會長ノ指揮ヲ承ケ理事會
評議員會ノ決議ニ基キ會務ヲ處理

本會々則成る

新たなる躍進へ

誌代・會費について 前號に豫
告した通り本號より誌代會費をそ
れぞれ二割引上しました。

脚（あし）を行（い）ふことゝなつた。

“御賽錢の寄附”

前號の本變に掲載した通り本會
は愈會則を整備し内外の組織を充
實して不動の基礎をすへることゝ
なつた。上に發表の如く總裁には
管長、副總裁には四個大本山法主
を推戴、會長には淨土宗執綱が執
任する。

東北・北海道巡錫

七月末出發の豫定

兼ねて準備中の本部員の東北北海道巡錫は各支部よりの申込み頗る多くその整理に忙殺されてゐたがいよく七月末東京發八月半ば頃まで各地に別時、講話、座談會を聞きつゝ宗祖の御遺徳宣揚の行

陸海軍病院慰問

〔淨土〕寄附者芳名

[illegible]

俳壇

大回耳動子



大分縣 石堂柑山生

鷹目屋の來て並びけり鰯を釣る

評一釣りの中で鰯釣りほど大衆性のあるものは他になからう。それを最も手際よく見せて呉れた一幅の俳壇にも等しい句である。此の邊の地理を心得てゐるチンドン屋であらう。『鷹目屋』が利いてゐる。

千葉縣 安田 九 阜

櫻子の餘のびてをり紙芝居

評一紙芝居を熱心に見てゐる四五歳の稚子の状態を遺憾なく表はしてゐる。どこか前の句と似てゐる所があるやうだ。中七字が良い。

栃木縣 大 輪 云 海

緑蔭の岩漣に揺られをり

評一ひとくくと推し寄せてゐる漣の爲めに緑蔭の下にある岩は、何だか揺れてゐるやうに見えると云ふのである。此の岩の上に一點ひしてみたいやうな氣がしてならない。

高崎縣軍病院 小 平 勇 一

活花や牡丹の花をまんなかに

飯田市 古川 哲 洲

門通る人呼びとめて新茶かな

和歌山 縣

雪のごと咲きも咲きたり除蟲菊

新宮市 奥村 映 水

新樹風ねむたく汽車を待ちあはす

善通寺陸軍病院 尾崎 正 男

龍津瀬の風にふかれて青楓

米子市 宮本 盛 雄

三十の我に給ふや泣初

千葉縣 安田 保 治

青嵐の分れて床の軸にあり

廣島市 小 楓 邦 香

抱きし兒の睫毛わたりて風かほる

東京市 三野 輪 幸 節

シヤボテンの花燭臺の灯をうけて

高岡市 館 井 露 水

魂棚の燈に雨を包はせて

豊中市 藤 森 義 治

空虚なる眸にまつわりぬ春の蝶

名古屋市 反 淵 青 歩

小包を奇麗にときて更衣

三重縣桑名郡 近 藤 内 海

川の邊に釜一つあり五月雨

栃木縣山町 大 輪 雲 海

麥の穂の吾になびくを歩きけり

高岡市 内 山 透 水

行春や膝に抱かれて鬼の子

足利市 松村 幸 吉

麥畑のあさき緑が目に沁みる

京都市 永田 七 郎

船造る町明けやすき五月かな

小樽市 中村 茂 樹

短夜の車窓に山の見えて來し

滋賀縣蒲生郡 重野 ふみ子

うたゝねに騒がしからず蟬の聲

京都市 福島 孝 治 郎

梵鐘の流れ來そりな臘月

會津縣 藤 藤 舟

桑摘む子歌を唄へば霧はるゝ

東京市 木 全 哭 詩

琴線にふれて蛸鳴き何づる

飯田市 古川 八 重 子

明六つの鐘靜かなり楠若葉

堺市向陽町 木 全 澄 弘

薫風の頬をめぐれる汀かな

京都市 鈴木 白 舟

父の夢母の夢さめ蛙聞く

小樽市 福 浦 靜 江

散りいそぐ櫻の花をふみにけり

豊中市 福 永 龍 馬

春燈下又の便りに四つ葉かな

大阪府 根野谷 記三弘

池の面の若葉は映えて水ぬるむ

富山縣高岡市 館 井 露 水

吹きつける確氣にひそと百合咲け

品川區大井 稻垣知恵子

新緑におくれてのびし國國の芽

福井縣 豐 登 宗 巖

そりたての頭に來り赤とんぼ

奈良縣 山下 龍 章

いつの間に春は何處へ暮

小樽市 平 井 善 慈

熊笹の上に咲きたる辛夷かな

香川県 日向 法 圓

あへぎつゝ老鷹の坂案じをり

香川県 荒 木 は ち

吹きそむる風にこたへて鯉のぼり

富山縣 内 山 透 水

御忌果ての幕外しゐる知恩院

東京市 惠

うたたねに鳴く宵雨の蛙かな

朝鮮平壤 三浦砂千子

水の上にゆらく柳の青さかな

横濱市 小 宮 繁 八

燕や縹に青葉雨煙り

北支那にて

豚の子や青麥畑を探りゆく

名古屋 百々眞須美

春の夜を子等の寢息の静かさに

名古屋 百々眞須美

投稿規定

官製はがきに一回二句以内とし「浄土」編輯部係あて送ること。



法悦のひと時

—— 日常勤行式解説 ——

中村 辨康

(一〇) 禮 讃

如來を讚美しつゝ敬虔に禮拜す
五種正行の中の禮拜讃嘆の行?

六時禮讃 (正しくは往生禮讃偈と云ふ)

日沒禮讃偈 (十二光佛等の名號) — 十九拜

初夜禮讃偈 (無量壽經中の讃偈) — 二十四拜

中夜禮讃偈 (龍樹の十二禮偈) — 十六拜

後夜禮讃偈 (天親の往生論偈) — 二十拜

晨朝禮讃偈 (彦琮の願往生偈) — 二十一拜

日中禮讃偈 (善導自作の十六觀偈) — 二十拜

又は

三尊禮 (日中禮讃偈の一節彌陀觀音勢至の三尊に禮拜す)
(備考)

六時禮讃は善導大師に依て創始せられたるもので、謂はゞ讚美歌とも云ふべき唱頌である。我國に於ては法然上人のお弟子である住蓮房安樂房の二人が、東山鹿ヶ谷に於て哀調を帯びた節を付けて初めたのが始めて、之に依つて念佛門に歸するものが多かつたと傳へられて居る。彼の鈴蟲松蟲と云ふ院の女房二人が此禮讃に促がされて禁中を抜け出で鹿ヶ谷に於て出家した事件が起つた爲に念佛門に大彈壓が降り、師匠である法然上人まで遂に四國に流罪となられたなど、此禮讃に就て有名な説話がある。現に淨土

宗、西山派、眞宗各派、時宗等に用ゐられて居る。之は節博士を附けて上中下三段の聲で唱頌し禮拜するものである。關東に於ては讀經の前、關西に於ては讀經の後に行はれたのであるが、最近法式協會の研究協定に依つて一般的には誦經の前後何れでも法要の時所に従ふ事になつたが、大體に於て晨朝法要の時は誦經の前、日中日没の法要等には讀經の後と定められた。

一體禮拜には下品中品上品の三種がある。下品は掛、中品は跪、上品は稽首即ち頭面禮足である。掛とは兩手を前にして或は上下し或は左右にひろげて會釋するものであり、跪とは兩膝を地につけ姿勢を危ふい形にして前へ少し曲げるものを云ひ、稽は首が地につくもので、之に二種類ある。一は兩足兩手額の五輪を地につけるもの、二は五體を地に投ずるものである。我國に於て「五體投地禮」と稱するは兩足兩腕額の五を下につけ掌を上向に平にして佛足を受け捧ぐる思ひをなして拜するものを云ふのである。

この禮讃に於てはこの「五體投地禮」をなすものにて、始め一聲で立つ準備をなし二聲で立ち、それから「南無至心歸命禮」と云ふ發聲を聞いて「西方」で坐し「阿彌陀佛」で懇慫に拜禮するのである。坐禮をなすのは略式で狭き座敷などにては止むを得ないことである。

講 贊

淨土の行には五種の正行がある。即ち

讀誦正行（淨土の三部經を一心に讀誦すること）

觀察正行（心を專注して思想し觀察し憶念すること）

禮拜正行（一心に阿彌陀佛を禮拜すること）

稱名正行（一心に阿彌陀佛の名を稱ふること）

讚歎供養正行（一心に讚歎し供養すること）

此内第五を「讚歎」と「供養」とに分ければ六種正行となる。

今ま此禮讃は主として禮拜正行と讚歎正行との二つをかねて居るが一分の觀察正行が含まれて居るのもある。ことに「日中禮讃」の如きは觀無量壽經の十六觀を讚頌したもので、如來様の御相好を拜しながら「彌陀身色如金山、相好光明照十方」等々と唱和して行くのであるから、おのづから如來様が思想され憶念されるのである。

だから此日常勤行式に於て「禮讃」を加へることに依て「五種正行」がより一層明瞭に行はれる事になる。

無論一々の偈の時「禮拜」はするのだし、歎佛偈を初めとして一切は如來様を「讚歎」して居るのであり、香華燈明などの「供養」も捧げられて居り、本尊前の莊嚴などをつくづくと眺めて僅かながらも淨土への「觀察」も行はれて居るのであるから「禮讃」無くとも「五種正行」は大體備つて居るのではあるが、取り立てゝハッキリと意識されない憾みもあるから、時間の餘裕さへつけば此の「禮讃」を加へた方がよいと思はれる。

とは云ふものの大體に於て「禮讃」は字の通り如來様を感情的に讃美するのが中心になつて居る。節奏よくしき聲に抑揚を付けて如來の端嚴微妙な御相好を観察しながら五言乃至七言の偈文の意味を味ひ、心靜かに禮拜を重ねて行く時、身はさながら淨土に在るの思ひが深く、我とはなしに何時しか法悦歡喜の中にスツカリ没入し融入してしまふものである。

世には宗教を感情の中に追ひ込んでしまふ事の危険を唱へる人もある。それは「神秘」なき宗教は宗教でないと云ふ偏狹な宗教觀へ墮ちて仕舞ふ危険があるからであらう。さう云ふ氣持はよく分るが、さればと云つて宗教から感情を取り去る事は出来ない。むしろ信仰は感情から出發するものでさへあると思ふのである。

即ちいくら理性に勝つて居る人でも信仰に入る時は、理性がスツカリ屈服して感情がグンと強く湧き上つて來るのが普通だからである。

感情が情操となり、情操が心操となり、心操が意志となつて生活を美化して行くのが信仰の常態である。それは理智が意志を促がして行くものよりも強靱であることは多くの事例が之を立證して居る。

殊に淨土教の信仰は「如來の大慈悲を感じる」ことに依て成立するものであるから、何うしたつて感情が先に立たなくてはならぬ。一時的な感情は無論浅いものであらう。然し度重なる場合、それはもう一時的なものではなくなる。

イヤたつた一返でも非常に深い感銘を受ければ、一生の生活指針と

なつて何時でもその感激を再現し得る程の強いものである。だから一步を誤ればいけないかも知れぬが、全然毛嫌ひしてしまふことは少々頑固過ぎはしないかと思はれる。

況して淨土教の信仰はいつも一つ處に止まつて居るものでなく常に生長して行くものである。常に自分の拙さを痛感してよりよきにお育てを念願して行くものだからである。だから決して理智的な反省を闕却するものではない。殊に佛教は何つちかと云へば理智的な宗教である。他力教と云へども矢張「般若」の智を重んずるのである。謂ゆる三藐三菩提即ち正覺を基底として咲き出て居る華である。

世親菩薩の願生偈には

「佛慧明淨の日、世の痴と闇と冥とを除き、梵聲悟らしむること深遠なり、微妙にして十方に聞こゆ、正覺の阿彌陀法王、よく住持したまへり、如來淨華の衆は正覺の華より化生し、佛法の味と禪と三昧とを愛樂して食となす云々」

と云つて居る通り「正覺の阿彌陀佛よく住持し玉へり」であるから私達の信仰も亦た「正覺阿彌陀の華より化生し」出づるものである。

然も「佛法味」と「禪三昧」とは宗教感情を満足せしむるもの即ち「信仰的食物」に外ならないものであつて見れば、信仰を生長せしむる爲に情操を豊かにすることは寔に當を得たものと云はねばならぬ。

實際此の「禮讃」に依て私達の如來を欣慕する感情が高調するならば、乾度念佛への情緒が濃厚になつて來て、唱名せずには居れない御

動にかられるであらうことは、誰でも経験する處の心狀である。

音樂でも聲樂でもすべて音樂は一番手取早く人々を「美」の世界へ卷込んで仕舞ふものである。ことに聲樂は感情が強く弱く色々に表現されるから、樂師も聴衆も渾然一體となつて其「樂曲」中の人物なり感情なりの中にとけ入り、我もあらず人もあらず、唯だ其「曲」の姿が浮彫のやうに刻々に推移して行き、そこに「美」の世界、一分の「淨土」が現はれて来る。それは純感情の世界、詠嘆の世界であるけれども、如何に多く信仰を涵養するか計り知れないものがある。殊に「禮讃」は其内容が如來の功德美を稱讃するものであり淨土の莊嚴美を讃歎するものであるから、宗教美の温かい感情に浸り得る最も手取早い行爲である。

積極的な意志的な強い宗教を要求する人に取つては或は物足りないと思ふかも知れない。否なむしろそれは夢のやうな陶醉境として排斥すべきものであるとするかも知れない。

然し乍ら人間は意志だけが尊いのではない。意志は感情と智慧とに裏付けられて始めて尊さを發揮するものである。豊かな美しい感情と明敏なすどい智慧とが融け合つて出て来る意志の發動でなければ、動もすれば頑なとなり偏頗となつて仕舞ふ恐れがある。それでは人格的ではない。人格は知情意の三つが具合よく揃つて居るところに圓滿さがある。低い低いなりに高い高いなりに萬遍なく知情意が揃つて居なければ、人格的には片跛である。頑固になつたり偏執になつた

り冷酷になつたりしたのでは何うも餘り感心しない。ところが多くはさうなり勝なのである。殊に感情は放置して置くと思ひ方へ行き易い。それを無理に矯めると逆効果となる。だから例へ一時は陶醉的な状態になるにしても結果から見ても感情を美化させる方がいいのである。求道心さへ強ければ何時までもそれに耽溺し陶醉して居る害がないからである。そして淨土教の信仰には常に反省が忘られて居ないからである。

況して此勤行式は禮讃ばかりをやつて居るのではなく、ホンの一部分として加味されて居るもので、弊害など寧ろ要らぬ心配と云ふべきであらう。イヤ却て之があるが爲に鑑上更に花を添へた好きがあるのであつて、事實また萬人に喜ばれるところの特徴の一つでもある。

私達は段々此勤行式に導かれて、今は全く宗教感情が高調し如來を讃歎し淨土を讃美する氣持に満ちてしまつた。

此處に至つては一刻も早く念佛の實踐に移りたいものである。

如來への欣慕！

淨土への憧憬！

これは正しく此「禮讃」唱和の賜物と云はねばならぬ。

禮拜正行と觀察正行と讃歎正行との渾然たる「禮讃」稱揚の、如何に嬉しい一と時であるかは知る人ぞ知る、誠に一度だけ行つた人でも増しく経験するところの嬉しい法悦境である。

編輯後記

◆今年は大分ハイキングが流行したそうである。国民保健の上から誠に結構と云はねばならない。この分では夏山も随分繁盛するこ

とであらうと評判されてゐる。が、一面にはハイカーの激増と共にその質の低下が歎かれてゐる。公衆道徳、山の道徳の低下である。

◆時局下に於いては精神力の低下は最も恐るべきものである。統制が強化されつゝある一面に於いて開取引が横行し、貯蓄が奨励されつゝある一面に於いて浪費の増加しつゝある部面がある。国民保健が高唱されつゝそれが一面に於いて卑俗なる遊戯化しつゝあるのではいよゝゝ浮ばれまい。

◆聖戦も第二年を迎へる。興亜の大業のため大陸に屍を埋めた多くの英霊がこの同朋の我利的態度

を見たら何と云ふか。

◆英霊の新盆再度のお盆を迎へる多くの遺族がある。英霊は必ず我が家を訪れ、その友を訪ねるであらう。その時英霊の問ひに對して立派に答へ得るだけの覺悟が出來ておらねばならない。

◆お盆を迎へるに際して我々が決意を新たにしなければならぬのはこの事である。大陸に骨を埋めた勇士の靈が笑つて九品の淨土に往生し得るやうにすることこそ國民のつとめである。聖戦に草を喰み泥をすゝつて戦ひつゝある兄弟に立派な挨拶が送れるやうにすることこそ其後のつとめである。

◆戦時下の盂蘭盆會はかくて實に大きな國民的行事である。その意味から本誌は盂蘭盆會の意味を各項目に渡つてそれぞれ平易でしかも専門的に解説し心からこの行事に参加出来る様、うら盆特輯としたのである。(道)

◆本會出版物の御注文は振替郵便が御便利です。振替口座番號は東京八二一八七番

◆御注文の場合には種類、部數、代價を楷書で明瞭に御書き下さいますやう。尚送料をお忘れなき様お願い致します。

◆勝手乍ら代金引換は一切お断り申上ます。

◆その他お問合せは往復はがきかまたは返信封同封で、御願します。

◆會員で御住所御變更の方は現住所と共に前住所をも御明記の上御通知下さい。

◆本誌掲載の廣告は一切左の店で取扱つてをりますから廣告掲載御希望の向は直接その方へ御問合せ願ひます。

本誌廣告一手販賣

株式 正路喜社
會社
東京市京橋區銀座西七丁目
電話代表銀座 五七六六

淨土 七月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十一年六月三十日印刷納本
昭和十一年七月一日發行

(定價十二錢)

編輯兼 眞野 正順
發行人

印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人讀仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價金十二錢

(送料五厘)

會費金一圓二十錢

一ヶ年 (送料不要)

法然上人鑽仰會刊行圖書

東京市芝區芝公園明照會館
振替口座東京八二一八七番

中村辨康著

(四六版一三〇頁總ルビ付)

法然上人の信仰生活

定價三十錢
送料六錢

中村辨康著

(四六版八〇頁總ルビ付)

信仰讀本

定價二十錢
送料三錢

藤井實應編

(增刷中)

菊半截一四四頁
總ルビ付

法然上人法語抄

定價三十錢
送料六錢

佐藤春夫著

特製ノート型、天金
十二ボ總ルビ、三〇〇頁

法然上人
別傳 掬水譚

定價四圓五十錢
送料二十二錢

中村辨康著

(四六版七〇頁總ルビ付)

講話一枚起請文

定價十錢
送料三錢

大野法道著

(四六版六〇頁總ルビ付)

法然上人

定價十五錢
送料三錢

中里介山著

(三六版二五〇頁クロース裝)

法然上人傳

定價六十錢
送料六錢

佐藤春夫・吉田絃二郎・岡本かの子
倉田百三・都芳隨園著

(增刷中)

(四六版總ルビ付)

我が信仰

定價六錢
送料三錢

法然上人鑽仰會編

(菊版一一〇頁總ルビ付)

念佛讀本

定價二十錢
送料六錢

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和十四年六月廿日印刷納本 昭和十四年七月一日發行

淨

土 第五卷 第七號

定價金十二錢 (送料五厘)
滿鮮臺灣 金十三錢
外地定價